

伊藤さん

10月17日、アリタリア航空785便は、ほぼ定刻の午後4時15分にローマ・レオナルド・ダ・ビンチ空港着陸。機内に日本人は多かったものの団体はいったん集合した後に移動するから、パレルモへの乗り継ぎ便ゲートに到着した時は、廻りに彼等の姿はなかった。と思ったら、ベンチにポストンバックを抱えた日本人(らしい)紳士が座っている。六十台半ばと見受けたが、身軽に行動したのだろうか。

そのうちに団体客がぞろぞろ登場し、パレルモ便の三割ほどは日本人になりそうだ。予定時刻に搭乗が開始され、席に着いてみれば隣は先程の紳士だった。どちらからともなく言葉を交わす。

先程の疑問があっさり氷解した。仕事でアムステルダムに滞在中であるけれど、休みを取ってシチリア周遊に来たとのことだった。彼の地からであれば3時ころに到着したであろう。

機内では他にすることもなく、話し相手がいることは有り難い。しかしそれ以上にウマが合うというべきか、楽しく会話が盛り上がった。だいぶ旅慣れた人らしい。交換した名刺から伊藤さんと知る。シチリアに関する旅情報収集も抜かりがないようだ。このシリーズがといいながら鞆から英文ガイドブックを取り出し、「実用的で使いやすいです」と見せてくれた。

今夜の宿としてホテル・トニックをインターネット予約してあることを告げると、手慣れた様子でページを捲り、平面図で位置を確認し、ついでに中級に分類されていることまで教えてくれた。空港から市内への連絡バスが停まるカステルヌオーヴォ広場から300メートルほどの所で、彼の予定している宿とは、広場を挟んで反対側らしい。

今回の旅ではガイドブックの持参をやめ、それでありながら宿の所在地をきちんと把握しないなどと、いささか —— 旅をみくびった —— まま出発していた。伊藤さんに会っていなければ、すっかり暮れてしまった街をホテル名とその住所だけを頼りに探し歩き、なかなか見付からない上にさっぱり英語が通じないことに、焦燥の度合いを深めていたであろう。

パレルモ・ファルコーネ・ボルセリーノ空港へ着いた6時半には、夕闇が迫りつつあった。二人とも荷物は全て手持ちであったから、到着ゲートから市内連絡バス乗り場に直行する。此処でも伊藤さんの事前調査が役立ち、難なく目的のバスに乗車できた。市内までの料金は5€(717円)。カステルヌオーヴォ広場に到着した頃には、辺りは既にとっぷり暮れていた。

伊藤さんに別れを告げ、最前地図上で確かめた方角へ歩き出す。宿からインターネットで送られてきた E-voucher を印刷、持参していた。暇そうに店頭で佇んでいた店員に、これに記載されている住所を示しながら、一度尋ねただけで、道に迷うこともなく辿り着けた。方向感覚の悪さを自覚しているだけに、この程度のことで嬉しくなる。

先程の E-voucher を渡して簡単にチェックイン。四階の中庭に面した部屋で、どうせ窓から周辺が見えたところで、眺望など期待できないから、静かさが保証されたことが有り難い。

シチリア最初の食事

荷物を部屋に置くと、街歩きの装備一式を身に着けて食事へ出掛ける。ドレスアップならばともかく、なにやら物々しい身支度にいささか気が引けるものの、 —— 必要なものだけ —— と、バッグから中味を出し入れすると、往々にして使いたいときそれがなかったりする。結局、体裁よりも実

街歩きの装備

街を歩くときの出で立ちは、世間一般とはかなり違うようだ。デイパックを背負うのはともかく、これと対になったプレストポーチがある。ポーチの中味は、貴重品とカメラ関係、雑品に大別できようか。

貴重品といっても大して金目のものはないが、航空券、日本円、予備のユーロとドル、予備のクレジットカードなど。

カメラ関係は、交換長焦点ズームレンズ、ストロボ、取扱説明書、カメラ安定用粘土(P. 17)など。

そして飲料水のペットボトル、街の平面図、ルーペ、ティッシュペーパー、レンズ拭きクロス、電子辞書、老眼鏡、サングラスなども同居している。



質を重視することにした。多少の恥ずかしさがあっても「旅の恥はかき捨て」で通している。

閑話休題、フロントでまず市街平面図を入手してから、この界限にあるお勧めの食事場所を尋ねた。レストランを併設しないホテルなので訊きやすい。フロント係は —— 今日は月曜日なのでお休みの店が多くて. . . —— といいながら、カウンターの下から一枚のカードを取り出した。ア・クッカーニヤというレストランで、裏に地図が印刷されている。 —— 此処を出て右へ行き ——、説明しながら、地図にボールペンで道順を書いてくれる。徒歩で二、三分の所らしい。ついでにキャッシュ・ディスペンサーの所在も教えて貰い、先に現金200€(28,936円)を調達した。

ア・クッカーニヤは至近の判りやすいところにあり、入り口は広々と開放され、店内の明るさも含めて入りやすい雰囲気だ。それに引き込まれたのか、シチリア最初の食事と逆上していたか、室内に席を占め —— 気持ちの良い —— 屋外で食べられる機会をみすみす逃してしまった。

中級よりは上の感じがするこの店では、英文メニューも用意されている。それでも勝手が判らず注文までにやたら手間取る。ようやく第一皿として農夫のスープ、第二皿に仔牛のシシリー風ロールを決め、ワインは赤でお勧めを頼んだ。

間もなく運ばれてきたワインを飲んで落ち着きを取り戻すと、おもむろに店内を観察し始めた。入り口付近には食材を展示してあるコーナーが設けられ、砕氷の上に大物はメカジキから始まり、地中海の魚が多彩に並ぶ。メカジキの下半身がないのは、既に料理されてしまったということか。

視線を奥の方へ転ずると、どうやら日本人らしい三人連れががいた。そして間もなく、今度は二人連れの日本女性が来店し、食事をしているあいだにもさらに二人訪れる。パレルモにおける日本人比率を想像すると、異常な集中度といえよう。ガイドブックで紹介された店なのであろうか。

農夫のスープはエンドウ、ズッキーニ、白インゲン、茄子などの入ったコンソメで、素朴な味わいが好ましい。仔牛のシシリー風ロールは、チーズや挽肉などをホワイトソースで和えて、薄切り肉でロールしてから焼いたものだった。これも心配していたほどヘビーではなく、綺麗に平らげることができた。

デザートは抜きにしてカプチーノで仕上げる。勘定は、席料3€(434円)、スープ、5.5€(796円)、仔牛ロール9.5€(1,374円)、ワイン16€(2,315円)、カプチーノ2.5€(362円)だった。店の雰囲気にもふさわしく、料金の方も高めだと思う。



ア・クッカーニヤの店先。

時差調整

成田の免税店で求めたウイスキーを定量呑み、静かな部屋で熟睡できたせいか、気持ち良く目覚める。宿の朝食開始の7時に下へ降りた。ちなみにサマータイム中のこともあり、今朝の日の出は7時4分だから表はまだ真っ暗だった。

ビュッフェスタイルの朝食は、一畳ほどの面積に皿が並べられているだけのシンプルなものだった。この時間帯に出入りしていたのは、いずれも中年男のビジネスマン風で、観光客は見掛けない。軽めの朝食で終わらせ、7時半には街へ出た。

薄曇りだけれど風もなく、薄手のシャツ一枚で歩いていても寒さを感じない。平日の朝にもかかわらず、街行く人はあまり多くない。通勤通学ラッシュにはまだ早いのか、そもそもそのようなものはないのか。昨晚入手した市街平面図を頼りに、それを見てあらかじめ目星を付けたところへ向かう。とはいうものの、方向性の目安程度で、周辺を見回して興味を感じずれば、構わずそちらへ逸れて行く。先を急ぐ必要などないのだから。

今のところは時差調整段階だと思っている。時差といっても日本とイタリアのあいだにある7時間ではない。日本首都圏の(気ぜわしい)時間と、シチリアの(多分)のんびり経過して行くそれとの、感覚切り替えだ。取り敢えず二日くらいはそれに充てつつ見物するつもりでいる。



ホテルリストによると79年築造とのことだが、古めかしい螺旋階段で一階のフロントを見下ろせる。



聖イグナティウス教会。8時。

そのような理由抜きにしても、第二次大戦の戦禍をあまり受けていないこの街は、路地裏を歩いて行くのが楽しい。迷路というほどではないが、それでも思わぬところで既に歩いた道筋と交差し、これを繰り返しているうちに、次第に自分の領域が広がって行くように感じられるのは好むところだ。

マッシモ劇場、聖イグナティウス教会などを経由し、サン・ジュゼッペ・デイ・テアティーニ教会のキューポラに気をとられて歩いているうちに、交差点がただならぬ格調を備えていることに気付いた。地図で確かめるとクアトロ・カンティだった。17世紀初頭に建造された広場らしい。ちなみに Quattro (四) Canti (角)で、それならばそこ此処にクアトロ・カンティがあって良いわけだが、とりわけ格調高いこの辻(広場)がそう呼ばれているらしい。しかしせっかくの美しい辻がパレルモで最も交通量の多い場所になり落ち着いて見物もできないのは何とも皮肉なことだ。



クアトロカンティ。

キューポラ

「キューポラ」と聞いて鋳物工場の溶銑炉を思い浮かべるのは、1950年頃に生まれたものにごく一般的かもしれない。広辞苑にも溶銑炉と説明されているから、日本人にとって一般的なのかもしれない。

しかし Cupola は本来丸屋根、ドーム状小塔などの意味であり、これから直立円筒形の溶銑炉がキューポラと呼ばれるようになったと思われる。根拠を探したが、残念なことに見付からない。

クアトロ・カンティから西へ向かい、緩い坂を5分ほど登るとカテドラルが見えてくる。ファサードが見たくて東側に回り込んだ。「カテドラル

ル」という割には地味なものだ。

北の方へ続く路地に、化粧荷馬車が数台集められているのが目を惹き、そちらへ寄り道する。お祭りの時にでも使用するものであろうと見当を付けたものの、大した細工ではないので早々に見物を切り上げる。この時点では「シチリアの荷馬車」が、実用に供されるものでありながら、華麗にして精緻な細工で有名とはつゆ知らぬことであつた。しかしいずれにせよ、此処に並んでいたのは程度の悪いものだ。

カテドラルの方へ戻る。前庭は四千平方メートルほどの広さで、周囲は柵で囲われ公園のように見える。ちらほらと散策する人やベンチに腰掛ける姿

が見えるけれど、いずれも市民や学生風で、観光客は佇むこともなくほぼ真っ直ぐ中央部にある玄関へ向かう。

内部にいたのは三十人ほどで、広いだけに閑散としている。見物人が少ないのも道理で、簡素というか素っ気ないというべきか、じっくり目を留めるようなものが見当たらない。結局5分足らずで一周し、退去することにした。

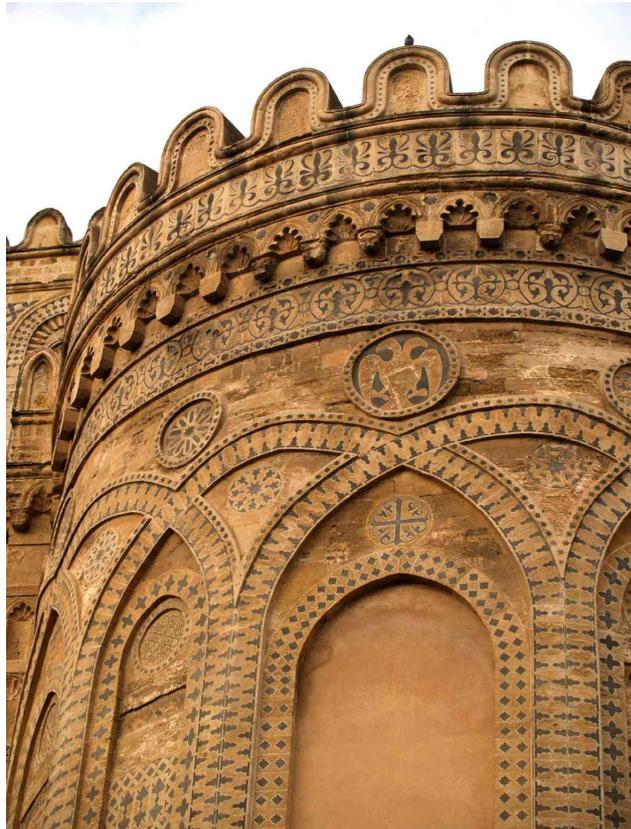
クアトロ・カンティから続くエマニュエル通りをさらに三百メートルほど行くと、ヌオーヴァ門があり、大型車はすれ違えない狭さで歩道もない。しかし迂回路らしいものも近辺には見当たらず、頻繁に行き来する車の間隙を縫うようにして急いで通り抜ける。

信号も横断歩道もない交差点がすぐであり、一方通行の三車線を絶えず車が動いている所を渡らなければならない。しばらく地元の人がどのように横断するか観察した。彼(女)等は無造作に多少車のスピードが落ちたその前を通過して行く。車が警笛を鳴らすようなことはなく、必要に応じてブレーキを踏んでくれる。基本的なことは判った。しかし頭で理解することと、体が納得することには隔たりがあり、かなり怖い

い思いをしながらの横断だった。



カテドラル。



カテドラルの後陣部。交差アーチに刻まれたパターンが美しい。

エマニュエル通を離れ、公園広場の縁に沿って南へ行くとノルマン宮殿がある。途中手間取ったにもかかわらず、カテドラルから15分だった。この二点間は直線距離にして四百メートルしかないのだ。さらにいえばパレルモの見所はコンパクトにまとまっているので、歩いて廻るものにとっては有り難い。

しかしこの時は「早く着きすぎたかな」とも考えられた。まだ9時になるまで数分を残し、10時に開場などの可能性も充分あったのだから。同時にそれでも良いと思えたのは、この日、効率よくパレルモを見て廻る気持ち

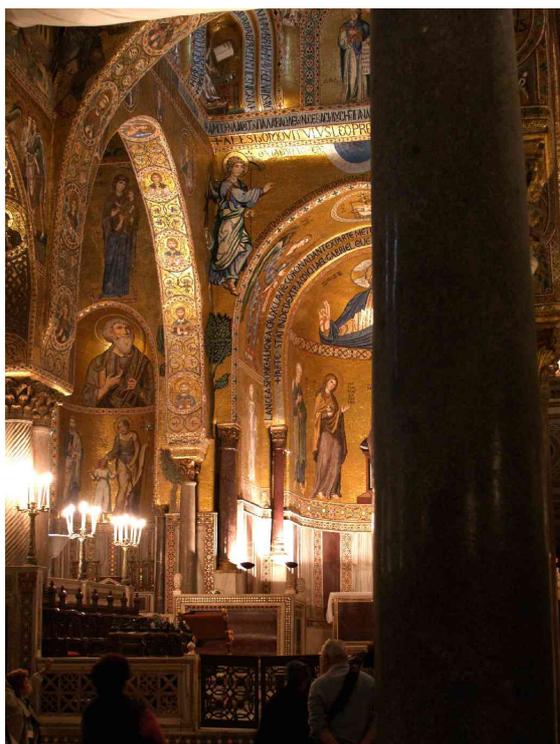
などなく、—— 取り敢えず時差調整日 —— ぐらいに考えていた故だ。

閑話休題、近づいてみるとゲートは開き、チケット売り場には係の女性がスタンバイしている。いささか拍子抜けしたが、文句をいう筋合いはさらさない。6€(868円)のチケットを購入し、すぐ隣にあるセキュリティチェックを通過した。空港で見掛けるのと同じ、荷物検査用のX線透視機とセットになった金属探知機だ。

観光地を訪れて、この類のチェックを経験したことがないので驚く。背中へのデイバックを降ろすような素振りをしながら、X線透視の必要を尋ねると、(少なくともこの朝は)そのまま行けと身振りで促された。金属探知機も作動していないようだ。

木製通路(地面から1メートルほど浮かせた橋(ウッドデッキになっている。元の状態を保護するためかは不明)の坂を登り、小高いところに位置する宮殿入り口へいたる。中庭への通路は「関係者以外立ち入り禁止」の制札があり、幅の広い階段で、二階のパラティーナ礼拝堂へ。

ノルマン宮殿。



ノルマン宮殿のパラティーナ礼拝堂。

1130年に着工されたこの礼拝堂は、シチリアにおけるノルマン芸術を代表するものらしい。ともかくそのモザイク画が素晴らしかった。王の私的礼拝堂ということなのか、三廊式ではあるが、小振りなことも好ましい。観光客もあまりおらず、ゆっくりと楽しめた。



礼拝堂後陣ドーム。「祝福を与えるキリスト」のモザイク画。



サン・ジョバンニ・デリ・エレミティ教会。

20分ほどを礼拝堂へ過ごし、他に見るところもない(発見できなかった)宮殿を後にする。市街平面図を見て、南へ200メートルほどの所にあるサン・ジョバンニ・デリ・エレミティ教会へ向かう。

12世紀前半の創建らしい。案内書によれば当初はノルマン様式が19世紀に当時の流行で回教風に改築されたとか。特徴ある赤く丸いキューポラは、改築の結果なのだろうか。

内部は簡素質朴で、祈りを捧げる場所としては絢爛豪華なそれより、遙かにふさわしいのかもしれない。回廊式中庭が美しかった。

この教会を出てしまうと、次の目標がない。来た道を辿ることなく、どちらかというに戻るように方向を定め、適当に道を選んでゆく。ともかく市街平面図を参照しながら、現在自分のいる位置を失わないことだけは気を付けた。

バラロー市場

10分ほど歩くと、市場を示しているらしい道標を見付けた。何となくそちらの方へ漂って行く。



突然眼前に数十、あるいは百を越す露店が出現した。ほとんどが生鮮食料品を扱っているが、乾物や日用雑貨が並ぶ店もある。活気があるのは露店だけれど、背後の商店も食料品関係が多く、この一帯がパレルモの一大食料品供給源となっているらしい。

買い込んで調理できないのが残念だが、見ているだけでも楽しい。魚屋の店頭には砕氷の上に鮮魚が並び、オヤジが時々水を振りかけながらだみ声で客を呼び込んでいる。大きいものはメカジキの姿が目立ち、輪切りにされて売り捌かれてしまったのか、下半身がなくなっているものもある。

キノコ屋に山積みされているのはマッシュルームの類だろうか。大きいものは握り拳ほどもある。資料として撮影しておきたくなり売手に声を掛けると —— キノコは良いが俺は駄目だ —— みたいなことをいう。どのような味わいなのか不明だけれど、キロ2.99€(433円)は安い。

赤、黄ピーマンは日本で見掛けるものより大振りだ。ブロッコリーに似た野菜がある。日本のものより一回り大きく、色は明るい。値段札に **Brocclo** と書かれているからやはりそうなのか。これはキロ1.99€(288円)。

市場のはずれでは飲料関係の安売り屋があり、判りやすいものでミネラルウォーターを見ると、2リットル12本が1.8€(260円)で特売されていた。ミネラルウォーターが安いヨーロッパにしてもこれは破格に思われる。しかし旅人に24リットルはどうにもならない。

界限を巡ること半時間、買うべきものもなくなただ見て歩くことにも倦みバラローを後にした。細い路地を適当に選んで東へ向かうと3分もかからずにマクエダ通りへ出た。400メートルほど先にクアトロ・カンティが遠望される。

通りの両側には店舗が建ち並んでいる。漠然と眺めながら歩くうちに、ショーウィンドー一面に電池時計やラジオカセット、その他小物家電を雑然と積み上げた店を目にして閃くものがあった。話は昨晚に遡る。

呑み始める前にデジタルカメラ画像データの保存と、カメラ電池の充電を済ませようとして愕然とした。コンセントに差し込むためのアダプターを持参し忘れたのだ。カメラもデータの保存用のハードディスクも、充電しなければせいぜい二日で動かなくなってしまう。

後悔しても始まらないので、取り敢えず呑みながら善後策を考えた。多少なりとも逆上しているから —— 安い電気器具と工具を買って、プラグの部分を取り取り、三口タップに直結したらどうだろう? —— などと乱暴な解決策が脳裏を去来する。

一夜明けて幾分冷静さを取り戻し、宿を出るときには —— これだけ日本の家電製品が世界を席卷している今、シチリアにしてもプラグをこちら仕様にしてないものも流通しているであろう。それならばアダプターが販売されていてもおかしくない。街歩きの片手間に探してみよう —— と考えていた。

いざ歩き始めると、周囲のあれこれに目を奪われ、すっかり失念していたけれど、ショーウィンドーを見て思い出したのだ。ドアを入ると店内も雑然と商品が積み上げられ、華僑系の夫婦とその息子(らしい)青年が忙しげに働いていた。持参してきた三口タップを見せながらアダプターを探していることを告げる。



充電を必要とする機器と充電システム。下写真左上が買い求めたアダプター。

英語は通じなかったと思われるが、探している対象はすぐ伝わり、青年は振り向くと背後にあった小引き出しからアダプターを一つつまみ出した。念のため三つ叉ソケットに差し込んでから購入。値段は1€(145円)だった。(持参するのを忘れた)日本製は、多様なコンセントに対応しているとはいえ1,500円もしたから、格安なことで得をしたような気分になり、そして昨晚からの憂慮が一気に解決したことで嬉しい気分になる。



自転車屋が並ぶ。



ローマ通りを荷馬車が行く。慌てて撮ったために拙いカメラアングルだ。

いて、その一角の窓ガラスに INTERNET POINT と大書してある。しかしインターネットカフェの類ではなく、入り口はビジネスホテルのフロントに通じるものしかなかった。

訝しく思いつつもとにかく中へ入ってフロント係に声を掛けた。「間違いない」との返事に続いてパスポートを要求された。「宿泊ではないが...」と聞き返すと、テロ対策のために法により定められているといった返事だ。差し出したパスポートのコピーをとり、台帳に何事も記入していた。

電気屋を出てからも、裏通りや狭い路地を拾って行くけれど、いったん宿へ戻ろうという気もあり、方角としては南を指していた。ローマ通りへ出る手前で、路上に無数の自転車並んでいる。一瞬日本の都市圏駅周辺の不法駐輪を想起したが、近づいてみればいずれも新車ばかりで整然としている。

よほど大規模な自転車屋があるのかと思ったのは早計で、間ロー、二間の小規模な店が十数軒集まっているのだ。同業者が軒を連ねる街として思い付くのはイスタンブールで、彼の地ではライター屋、ストーブ屋、水道金物屋など、そもそも日本では存在しないような業種の店が集中していることに驚かされる。イタリアにそのような傾向があるのかは不明だけれど、少なくともその後一ヶ月のシチリア島めぐりでは自転車屋も含めて類似の光景にお目にかかることはなかった。

自転車屋通りを過ぎてからは、あまり寄り道をすることもなく宿のそばまで戻った。出がけにフロントで「50メートルほど先にインターネット・ポイントがある」と聞いた、それを利用するためだ。

いわれたその建物は風変わりなところで、ホテル、B&Bなど五軒が営業しているビルだ。別段「系列」などではなく、それぞれ独立しているらしい。一階部分が表、裏をつなぐ通り抜けになって

所定の手続きを終えると、彼はカウンターの下からノートパソコンを取り出し、先に立って狭いロビー隣接した会議室風の部屋へ案内してくれた。会議用テーブルの一つを適当に選び、配線して準備を終える。—— フロントで待機しているから、PCとこの部屋は自由に使って —— とのことだ。

カメラ、ブレストポーチ、デイパックなどをテーブルの上に置き、老眼鏡を取り出してインターネットへのアクセス開始。ニフティへの接続も漢字表示も問題なく、個人ページへログインしてメールが読めるようになる。しかし一応「順調」とはいうものの、恐ろしく通信スピードが遅い。

どうせろくなメールはないはずだから、サラサラと読み流して終わりにしたいけれど、メールが表示されるまでに時間がかかり、とても思惑通りには行かなかった。いらいらしながら結局此処で一時間近く費やし、料金は6€(868円)。

12時を廻っていたので、そのまま昼飯にする。そうはいつでもさほど飢えていたわけではなく、イタリアの昼食時刻からすればまだ早い。まずはじっくり店探しをする。

スパゲッティ・ポモドーロ

どうせならば宿から近い方が再利用しやすいであろうと、界限を風潰しに歩いてみたが、思いの外レストランが少ない。おまけに昨夜屋外で食べ損なったことがこだわりの引き金となっていたので、さっぱり見付からないまま半時間が経過した。結局昨夜食後の散策中、表にテーブルが並んでいたベルモンテ通りへ行く。しかし改めて見ればレストランはなく、あるのはカフェカバルのみだった。

次第に意気消沈してきた時、カフェの広告が目を惹いた。スパゲッティ・ポモドーロ(トマト)は、今回旅の参考書として持参している料理本に —— イタリアンといえば、トマトソース。(中略)シンプルでいて素直においしい —— と紹介されていた。眼前の写真は料理本のものより、さらに美味そうだ。

そばに席を占めると、すぐにウェイターが現れた。ポスターの写真を指しながらスパゲッティ・ポモドーロを所望する。あっさりそれはないといわれ、がっかりしながらもスパゲッティの類があるのか訊いてみた。

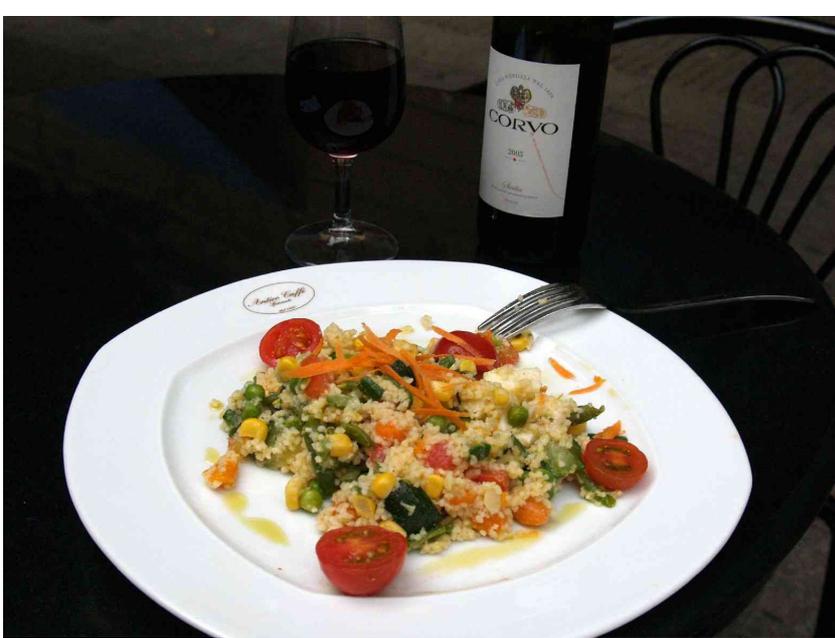
彼は隣のテーブルに置かれていたチラシのようなお品書きを、こちらのテーブルへ持ってくる、その一部を指でなぞりながら —— 此処に並んでいるのがその類 —— と云った。老眼鏡を掛け眺めて見るがさっぱり判らない。ともかく一番上にあるのを注文した。



左上にスパゲッティ・ポモドーロの写真。

PIATTI DEL GIORNO	
Antico Caffè Spinnato dal 1860	
via Principe di Salaparuta, 107/115	
PRIMI	
❖ Insalata di Cous Cous con Verdure (Cous Cous, Pisellini*, Zucchini*, Carotine*, Fagiolini*, Mais, Pomodoro Fresco, Basilico, Mozzarella)	€ 6,50
❖ Bucatini con Broccoli in Tegame (Broccoli, Zafferano, Cipolla, Passolina e Vinioli)	€ 6,00
❖ Penne alla Norma (Melanzane, Pomodoro, Ricotta Salata Stagionata, Basilico)	€ 5,50
❖ Insalata di Riso (Pomodori, Carotine*, Mais, Pisellini*, Tonno, Sals*, Pepe, Olio)	€ 4,00
❖ Quiches Miste	€ 3,50
❖ Timballi di Pasta al Forno con Carne o Melanzane (Anellini*, Farciatura di Carne o Melanzane, Piselli*, Pomodoro, Prosciutto, Mozzarella)	€ 3,50

お品書きのPRIMI(一番目の料理)グループ。パスタはこれに含まれる。



クスクス。



スパゲティボンゴレ。

大して待たされることもなく到着した料理は、始めて食するものでありながらその名に覚えのあるものだった。元々は北アフリカの料理でクスクスだ。地理的な影響か、はたまたアラブ支配下にあった時代の名残か、ともかくクスクスはシチリアの郷土料理といっても良いものらしい。

しかしスパゲッティを食べたいと思っていただけで、何か裏切られたような気分になる。一見米粒のように見える粒々は、小麦粉を固めたものなので、これでもパスタの一種なのだろうか。ともかく量が少なかったことを幸いに、これを手早く片付けてスパゲッティに再挑戦することにした。此処の勘定はクスクス6.5€(940円)、赤ワインのハーフボトル6.2€(897円)。

ベルモンテ通りを東へ歩き、他にめぼしい店もなかったのも、昨晚利用したレストランの向かいにも屋外席が設けられていたことを思い出しそちらへ行く。昨晚の店を敬遠したのは、あまりに日本人が多かったためだ。

向かいの店に較べると、ボーイはアン

チャン風だしお品書きはペラペラで、大衆食堂的雰囲気強い。若干弱気になっていたの一番目の料理から判りやすいスパゲティボンゴレを選び、ワインは店の赤をハーフボトルにした。

屋内、屋外どちらも七割方の混雑で、結構繁盛している店だ。この界限にはモニュメントや由緒ある建造物などないにもかかわらず、観光客が多いのはそれなりに有名な店なのかもしれない。

まもなく到着したスパゲティは美味。パルミジャーノチーズの粉末は、小鉢にたっぷり入って、ティースプーンを添えて出された。何となく —— 本場だなあ —— と納得する。気持ち良くたっぷり振りかけて食べた。

食べることに不満はなかったけれど、食べる技術に関しては最悪で、スパゲティボンゴレの汁気が皿の廻りに飛び散ってしまう。食べ終わる頃にはテーブルクロスは皿を中心に点々とシミが付き悲惨な状態になっていた。大変恥ずかしい思いをする。

このことがバネになり、今回の旅におけるテーマの一つが決まった。スパゲティを追い求めよう。と云っても、朝は無理だし夜も外食しない。従ってスパゲティを試す機会は高々三十回だから、極めようなどと高望みはしない。一通り自分で納得できればよいのだ。

カプチーノで二回目の昼食を締めくくる。勘定は、席料1€(145円)、スパゲティボンゴレ8€(1,157円)、ワイン・ハーフボトル6€(868円)。

カプチーノを飲み干さないうちに、ポツリポツリと降り出した。屋外席の客で傘から外れた位置に坐っていた人達が、椅子やテーブルを動かして雨を除けようとする。しかしそのような努力は、なんの役にも立たない土砂降りになるまで数分のことだった。

客が全員中へ避難したばかりか、テーブルクロスを外し、椅子も積み重ねて軒下に移動する。宿までは150メートルほどしかないけれど、この降り具合では走って行っても下着までびしょ濡れになるだろう。しかし先を急いでいないこともあり、小気味良いとさえ云える雨脚を眺めていると、なにやら愉快的気分になる。

降り始めが急激であったように、雨脚が弱まるのも速い。しかしカラリと晴れることはなく、この日は終日小雨もよいのままであった。

午睡を楽しみ、6時頃になって買い物へ出掛ける。歩き始めてから地図を拡げ、パレルモ港まで5分ほどしかないと気づき、そちらへ寄り道した。一万トンを越えるであろう大型客船が四、五隻停泊していた。此処からジェノバへは20時間、ナポリへは11時間ほどの船旅だ。ちなみに午後6時発のナポリ行きは、時間調整をして朝6時半頃に到着するらしい。

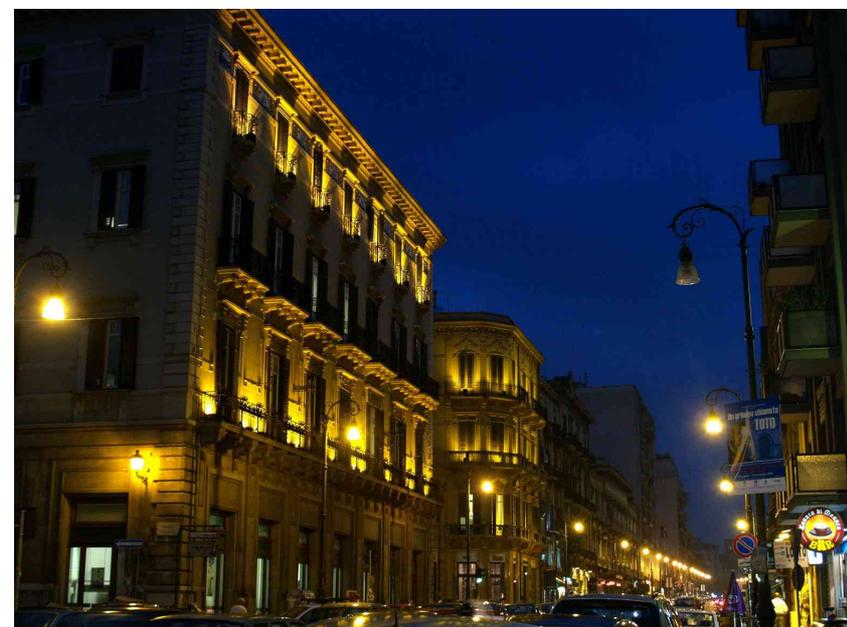


土砂降り。



パレルモ港にはナポリやジェノバへの大型フェリーやクルーズ船が停泊する。

港見物は20分ほどで切り上げたが、黄昏の市街を彷徨う。スーパーマーケットがあれば良いと思っていたけれど、それを探して歩いたわけではない。半時間ほどで散策にも倦み、食料品店で薄切りソーセージ126g 1.39€(201円)、ミネラルウォーター2ℓ 0.5€(72円)。宿へ戻って昨晚半分残ったウイスキーを水割りにし、ソーセージを肴に晩酌。この晩も静かに更ける。



ローマ通り。午後6時40分。

パレルモ(そして多分イタリア)の近距離バスシステム

路線名は番号で表示されている(バス停やバス後後面など)。切符はあらかじめ停留所近辺の *tabaccheria* (タバックリーア: タバコ屋(キオスク的何でも屋)) で購入しておかなければならない(車内では販売しない)。乗車後、速やかに刻印機に差し入れ、乗車日時を印刷する。定期券システムはあるらしい(それらしい利用者は見掛けた)が詳細不明。

モンレアーレ

明けて10月18日、昨晚の雨は上がったものの、どんよりとした雲は相変わらず上空に停滞している。くわえて見物に行きたいところは、昨日の時点で既になくなっていたが、それでも時間を持て余し近辺を一回りする。いったん部屋へ戻り、トイレなど使ってから10時にチェックアウトした。

宿代は二泊で予約金を含めれば176€(25,464円)、一泊12,700円相当は、設備やサービスからして割高に感じられた。パレルモ、ひいてはイタリアの宿代が高止まりしているのかもしれない。

この日の目的地はモンレアーレで、パレルモの近くにある古い町らしい。今回の旅にガイドブック持参をやめたことは既に

書いた通りだ。全くの手ぶらも不安でありながら、あまりまじめに準備しなかった結果、携えてきたのはシチリア紹介の安手の単行本と、イタリア料理本だけだった。ともかく「右も左も判らない」この島で、紹介本に出ていた地名の中から選択するしかない。モンレアーレならば、そこそこ近そうであるから、「時差調整」を兼ねて訪ねてみるのも良かろうと決めた。

行き方は前日 *Ufficio turistico* (観光案内所) で調査済みだ。空港からのバスを降りたカステルヌオーヴォ広場から市内路線バス104番を利用し、インディペンデザ広場で389番に乗り換える。104番は頻繁に、389番も半時間おき程度の運行らしい。

カステルヌオーヴォ広場のタバックリーアでバス乗車券一枚0.6€(87円)を購入。二枚買わなかったのは、394番は中距離路線で料金システムが異なっていると考えたため。ほどなく到着したバスは、坐っている人数と立っているのが同数程度の混み具合だ。傍らの若者に用意しておいたメモホルダーの *INDIPENDEZA* を示して確認する。路線の確認ではなく、途中下車し損なうことを危惧したためだ。訊かれると大概の人は責任を感じて、その停留所に近づけば教えてくれる。しかしこれは杞憂で、着いてみればインディペンデザ広場は終点であった。それでも若者は親切に「此処」であることを告げてくれる。礼を述べながら下車した。

モンレアーレ行きは広場が始発だけれど、間違えて一つ先の停留所へ行ってしまった。その結果として20分近く待ったに



パレルモではオートバイの走行が目立った。特に信号待ちをしていると、間隙を縫ってオートバイが先頭に集まるので、信号が変わった直後は、オートバイが先頭集団を形成して走って行く。日本では見掛けない風景だ。



モンレアーレ行き路線バス。左側のオバサンは停車を求めている。

もかかわらず、満員に近いバスにかりうじて乗り込むようなことになった。それから約20分間は、場末の感じはするものの、市街地の中をほぼ真っ直ぐ南へ向かう。ようやく街並みが途切れると、急な勾配を登り始め、そして古い街並み地区へ、乗車から半時間でモンレアーレの中心といえるカテドラル前の広場に到着した。地図を入手できなかったので、広場の名前は判らない。

料金を払おうとすると、運転手は —— 切符ならそのタバッケーアで買え —— と、イタリア語で云う。要するにこのバスも近距離路線なのだ。乗り逃げしない意思表示のつもりで、カバンを運転席脇に残し、タバッケーアへ飛び込む。先客がいたので多少待たされ、急いで表へ出ると、バスは既に走り出していた。

広場は一片が30メートルほどの四角い緑地を囲んで車道が設けられている。緑地を横切る歩道を必死で走った。幸いバスは広場の出口で幹線道路の車が途切れるのを待っている。オーイ、と叫んで手を振り、運転手が振り向いたので、カバンを手に掲げる身振りをした。彼は反対側に視線を投げて事態に気付いたようだ。

全力疾走(?)から小走りくらいにスピードダウンしバスのステップを駆け上がる。切符を運転手に渡そうとすると拒否されたので、それでは刻印を済ませようとするが、それも違うと云う。結局パレルモからモンレアーレは無賃乗車のまま、カバンを片手にバスを降りた。



バスのチケット(実寸大)。これはモンレアーレを離れる10月19日10時36分に刻印したもので、右端にそれが見える。

修道院ホテル

辺りには観光客の姿が目立ち、土産物屋や観光客相手を感じさせるカフェなどが建ち並ぶ。しかしホテルはない。パレルモで入手したホテルリストには三軒あり、住所も明記されているけれど、地図がない今、探しようもない。リストを見せて住人に尋ねる手もあるが、まだ12時前でもあるし、まずは付近を歩き回ってみることにした。

しかし50メートルほどで場末の雰囲気になり歩みが止まる。空身であれば500メートルくらいは行ってみるのだろうが、キャリーを引っ張り、おまけに石畳の坂道となればどうしても消極的になる。方角を変えても収穫がなく、半ば迷走状態でうろろうろしていると、白衣を着たジイサンに声を掛けられた。イタリア語で —— ホテルなら任せろ —— みたいなことを云っているらしい。

状況としては渡りに船とはいえ、客引きを信用したものかためらいがあった。しかし彼は腕を掴んでなかなか開放してくれない。盛んに *convento* を連呼するのは、修道院を改築したものなのか、あるいは修道院のそばにあるのか。こちらの戸惑いをみて、オヤジは、「ちょっと待て」というと、背後の店からチラシを一枚持ってきた。件の宿らしい。一瞥して悪くなさそうなので案内を乞うと、すぐそばにあった小型車に乗れと云う。

車は怖い。別段強盗とか暴行を恐れるわけではない。ただ、車だと数キロ離れたところまで簡単に連れて行かれ、 —— これでは遠すぎる —— と断ったとき、「それでは勝手に」と、放り出さ



修道院と入り口のドア。斜面に建っているため、こちら側から見ると一階が斜面の下からは三階部分になる。宿泊施設と判るような表示はまるでない。

れるのが困る。歩いて行く(行ける)ことを主張し続けると、すぐそこだからと一旦は歩行に同意したが、「それでも車が便利」と、譲らない。大体信用しても良さそうだと見極めが着いたし、半分は根負けして乗車した。

走り始めると、およそ300メートルで停車。近いことに嘘はなく、これほど近いならば、車にこだわったことも不思議なくらいだ。しかし彼の指す方を見ても、殺風景な石積建物の、ひたすら無骨

な板張りドアがあるだけで、ホテルらしいところはまるでない。

訝しく思い半ば呆然と立ち尽くしていると、オヤジの押した呼び鈴に応じて、僧服姿の中年尼僧二人が笑顔で出迎えてくれた。オヤジは挨拶に続いて短い会話を終えると、一步も中へ入らずきびすを返し去って行く。フロントらしいものもない玄関ホールで当惑していたら、「こちらへ」と尼僧の一人が、先に立って案内してくれた。彼女は英語を全く話さない。

薄暗い廊下が真っ直ぐ50メートル以上も続き、突き当たりを曲がるとき声を掛けると、もう一人の尼僧がそばの部屋から姿を現した。英語を話す宿泊者は彼女が担当するらしい。

曲がり角で案内者が替わり、さらに20メートル行き、三号室と書かれたドアを開けると、天井が高く古風な造りだけれど、内装は一新されている部屋が見えた。簡素な部屋だが、TV、電話も備えられている。突き当たりにある観音開きのガラス戸を開けると、小さなバルコニーがあり、気持ちの良い眺望が広がる。そして眼下にはプールまであった。

料金は一泊40€(5,787円)だし、中心部から近いにもかかわらず、街の騒音も隔離されている。すっかり嬉しくなり、客引きのオヤジに心中感謝する。街で再会したらチップをやる。

先程彼女が現れた部屋が事務室になっていて、宿帳への記入などはそこで行われた。尼僧服姿がキーボードを叩いてコンピュータを操作する姿は何となくおかしい。料金は現金の前払いで、ともかく無事チェックインも終わり、いったん部屋へ戻った。この廊下に並ぶ十ほどの部屋は宿泊用らしいが、他は全部空いているのかキーが鍵穴に差し込まれたままになっていた。

部屋でしばし寛ぎ、設備を仔細に見て回ったり、バルコニーからの眺望を楽しんだ後、記録用に写真を撮る。外に比べ室内が大幅に暗いから、フラッシュで光を補う必要がある。この際内外のバランスを取るのが難しく、過去に何回も失敗を繰り返してきた。しかしデジタルカメラ使用の有り難いところは、モニターで撮影結果を直ちに検討できることだ。失敗と思えば取り直せばよいし、不要となったショットは消去すれば無駄な記憶媒体占有をなくせる。



Casa delle Fanciulle 修道院の宿泊部分。遠くにカテドラルの鐘楼が見える。

落ち着いたところで昼食に出掛ける。相変わらず客引きのオヤジがうろうろしていたので、手を挙げると向こうも親しげな笑みを浮かべて手を挙げる。近づいて礼の1€(145円)を渡した。

それほど時間を経ずして判ったことだけれど、このオヤジは客引きなどではなく、小さな広場に面した床屋 Super Barba Sanchez の主だった。呼び止めて修道



床屋のオヤジと記念撮影。年末になりクリスマスカードにして郵送した。

院ホテルへ送り込んだのは、修道院のためか、旅行者の便宜を図ろうとしたのか不明とはいえ、ボランティア活動であることはほぼ間違いない。ちなみにこの店の前を十数回通って、一度たりとも髪を刈ったり髭を剃ったりしている姿を見たことがない。いつもボランティア活動(?)に専念していた。

話は前後するが、オヤジは良いカモが来たとばかり、握手した手を離さぬまま床屋の店内に引っ張って行く。散髪するためではない。店の壁には世界各地からの旅行者の彼と並んだ記念写真が、無慮数百枚貼られている。

自慢げにざっと見せておいて、—— さあお前との写真も撮ろう —— と強要する。自写像は好まないけれど、とても逃げられそうはなく、観念してカメラを手渡すと、オヤジはちょうど通りかかった隣店のコックに命じてシャッターを切らせた。

半ばヤケクソでお勧めのレストランを訊くと、—— それなら隣のパブが一番 —— と、これまた引っ張って行き、小体な店内を覗いて声を掛けた。まだ時分ときには早いせいか誰もいなかったが、すぐに奥から主とそのカミサンらしいのが現れた。

中にテーブル席が六つほど、しかし表にも二テーブルあったから迷わずそちらへ坐る。イタリア語メニューから無難なところでスパゲティカルボナーラとグラスで赤ワイン。運ばれてきたワインをのみながらゆったり辺りを観察する。

カテドラル前広場から直線にすれば50メートルほどなのに、観光客の姿はあまり見掛けず、地元

の人がちらほら行き交う程度で、まずは落ち着いて食事できる環境だ。しかし坐り心地が良くない。別段椅子に問題はないのだ。迷わず選んだ屋外席だけれど、屋外故に地表に排水勾配が付けてあり、歩いて通れば気にすることもない5%程度の勾配が、坐ってみると誠に落ち着かない。これは椅子の脚に2センチほどの下駄を履かせて坐って試せばすぐ判る。

今更席を移動するのも業腹だし、屋外で食べたい気持ちに変わりはない。椅子の向きを変えて試すと、左右方向に傾いているよりは前後の方がまだ。まもなく料理も到着し、食事を楽しむことに専念する。此処のスパゲティカルボナーラがどれほどのものか、他と比較もできないが、とにかく充分美味だった。勘定はスパゲティ6.5€(940円)、グラス赤ワイン3€(434円)、サービス料1€(145円)。席料とかサービス料の名目で、一定金額を徴収するのがイタリア流らしい。



カテドラルのそばで見掛けた装飾に馬車と着飾ったロバ。御者に撮影許可を求めると、脇にある料金表みたいなものを示された。良く判らないので1・(145円)払って撮影。文句もいわれなかったので相応だったのか。ホワイトバランス誤設定のため緑がかった。



カテドラルの裏庭。

カテドラル

モンレアーレのカテドラルは、12世紀後半に建立され「シチリアに残るノルマン建築の最高峰」とたたえられているようだ。しかし食後のほろ酔い気分でそのまま教会を訪れる気にならず、しばらく古い街並みの路地を当てもなく彷徨ってから、カテドラルの裏手へ廻った。散策したりベンチで憩う人達に観光客風は少ない。前方に見えた手摺りまで行くと、一気に眺望が開けた。

薄くかかった霧が景観を柔らかいものになっている。眼下に横たわる盆地はコンカ・ドーロ(Conca d'Oro: 盆地 黄金の)の最も奥まった部分であろう。果樹園や畑のあいだに散在する家から立ち上る薄煙が微風に運ばれ、どこかにたなびく。左手

彼方にはパレルモの街がほとんどその色彩を失って遠望され、その向こうに見えるのは海とも霞とも判然としない。ゆっくり辺りを一周してからカテドラルへ向かった。

モンレアーレ最大の、そして多分ただ一つの観光目玉だけれど、一方で未だに信仰の場としても機能している。このような場合は入場料などは徴収されない。観光客が絶えることなく出入りしているにもかかわらず、中は比較的静謐が保たれていた。全体を覆う厳粛な雰囲気、声高な会話を抑止すると共に、内部空間が大きい、かなりの人数がいたのにそれを感じさせない。

ゆっくり巡回する。なんといっても目を惹くのは、後陣のドームに描かれた「全能のキリスト」だ。しかしこればかりではなく、左右の壁やアーチなど至る所に素晴らしいモザイクが施されている。解説書によれば「12～13世紀にカルトジオ修道会がビザンチンとアラブ職人に制作させたもの」とのことだ。この時期、アラブ支配からノルマン支配に代わった頃で、当然のことながらアラブの技術や工芸も濃く残り、それにキリスト教がビザンチンとの繋がりをもたらしたことを思えば、シチリアの歴史をまざまざと感じさせる。

突然後陣ドームが煌々と照らし出された。事の次第が判らず、しばらく辺りを見回しているうちに、後陣と相対する位置に置かれた、コイン式照明スイッチとそれを操作する人を見



後陣ドームのモザイク「全能のキリスト」は、パレルモのパラディーナ礼拝堂のものに絵柄は似ているが、よりスケールが大きい。



1・(145円)硬貨で数分間後陣ドームなどの照明がともされる。照明なしだと右写真のように、キリストの姿は闇に霞む。

付けた。かつて見たことのない(そしてその後も見掛けなかった)装置だけれど、なかなか気が利いている。少なくとも撮影するものにとっては有り難い。

堂内を移動しながら合計16枚撮影する。今回の旅で用意した撮影用小道具にポリエチレン袋に入れた油粘土がある。スローシャッターを切る場合にカメラを安定して保持するためだ。通常そのような用途には三脚が使用されるけれど、十分な性能を持った三脚は重たくかつ嵩張るばかりでなく、使用を禁じている教会や博物館の類は多い。

そこで油粘土の使用方だが、支持台として利用できそうなベンチの背などの上に置き、それに押しつけるようにカメラを構える。油粘土の可塑性が上手く働き、安定するだけではなく、アングルも比較的自由に調整できる。

効果のほどは満足すべきものであった。例えば前ページ下部右のショットは、三分の一秒にもかかわらずブレることなく撮影できた。これの利用をより実的なものにしてくれたのがブレスポーチだ。いとも簡単に出し入れできるため、多少なりとも必要を感じたとき、躊躇うことなく油粘土を利用した。

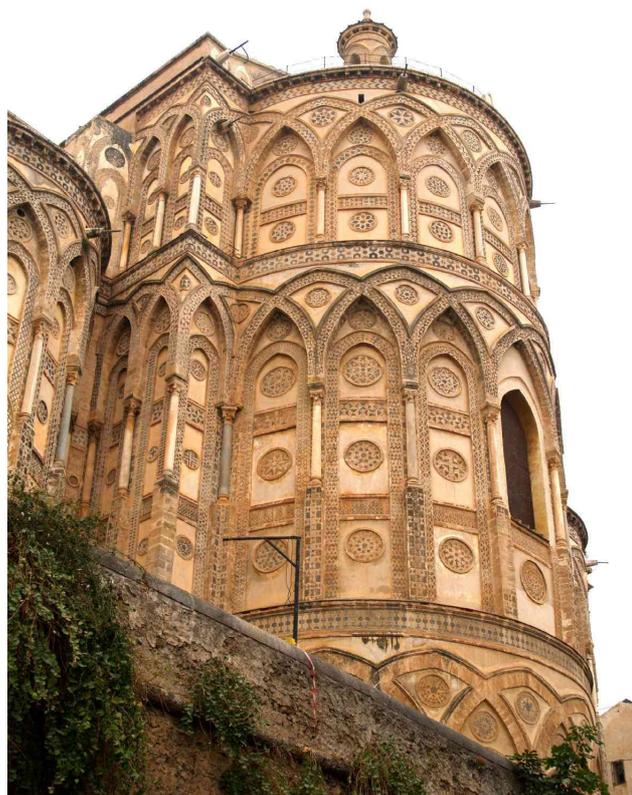
カテドラルを出て、しばらく界限をさまよううちに、思わぬ収穫があった。日本語版の「芸術と歴史の島 シチリア」なる書籍が土産物屋で店晒しになっていた。イタリア Bonechi 社から出版されイタリアで企画・編集から印刷まで一貫制作しているらしい。一昔前ならば「漢字」の障害によりなかなか実現できなかったことだけれど、DTP(Desk Top Publishing)の時代になり、一気に解決されてしまった。とはいえ、観光パンフレット程度ならばともかく、本格的書籍を目の当たりにすると、一種の感慨を感じる。A4版192ページのオールカラーだ。

ページを捲って内容には満足したものの、長いこと屋外に置かれていたためか、どこことなく草臥れた感じがする。携えて店内に入り —— これと同じもので、新品はないか —— 尋ねた。生憎、現品限りであったけれど、驚いたことにいとも簡単に値引きし、定価11.5€(1,664円)を8€にしてくれた。

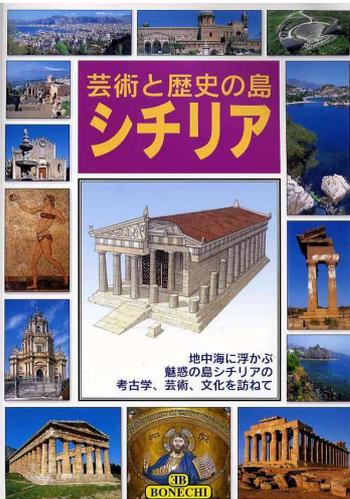
さまようことにも倦んできたし、早くこの本に目を通したい気持ちもあり、宿へ戻ることにした。それでも「一目散」ではなく、興味を惹かれたあれこれに目を配り、スナップ写真を撮りながらだ。宿に戻ったのは2時半になっていた。扉はロックされていたので呼び鈴を押すと、尼さんが笑顔で迎えてくれる。



装飾された梁、壁面のモザイク、共に素晴らしかった。



カテドラル後陣。象眼と交差アーチが美しい。



「芸術と歴史の島 シチリア」縮尺四分の一。

部屋で落ち着いて「芸術と歴史の島 シチリア」のページを捲る。予想以上に内容が充実していることに満足。もともとイタリア語の書籍として制作されたものを言葉だけ差し替えたかと推測される。ひょっとすると英訳からの孫訳かもしれない。一部日本語のレイアウトにおかしなところがあるけれど、それも愛嬌程度の話で、実用上の支障は全くない。

全島の遺跡がほぼ網羅的に紹介されているのは当然として、それ以外に先史時代から1948年の特別州認定までの歴史概観、簡単ではあるものの「伝統行事と民俗芸能」、「シチリアの人形劇」、「シチリアの荷馬車」、「料理」などの解説もある。この島に関してほとんど知識を持たぬ者にとって有り難い本だった。これがあれば一ヶ月の旅で行き先を失うこともあるまい。収穫に満足し、しばし午睡をむさぼる。

4時を廻って再度外出した。モンレアーレは斜面の中腹に位置し、宿のバルコニーから眺めると、上方数百メートルのところに瀟洒な教会も見える。どこか見晴らしの良い場所がありそうで、カテドラルを眼下に眺めれば面白そうと、それだけの方針で歩き出す。地図を見ながら歩くことを常にしているものにとっては何と

なく落ち着かない。

半時間ほど見晴台を探したけれど収穫はなかった。傾斜が一様であるために「凸凹」があまりないのだ。期待していた瀟洒な教会は生憎なことにアプローチの長い階段の登り口で鉄格子の扉を閉ざしている。しかしこの時点で修道院ホテルにもう一泊することを決意していたため、さらなる場所探しは明日の楽しみに残し、商店街の方へと下った。

カテドラル近くまで来ると等高線に沿って水平に延びる道にぶつかり、商店の連なりとレジ袋をぶら下げた人波が彼方まで続いている。大きな店こそないが、活気にあふれ品揃えも豊富だ。左右の店を眺めながら漫ろ歩いて行くと、風変わりなワインショップを見掛けた。瓶詰めワインはほとんどなく、代わりに大樽が並んでいる。



葡萄酒屋 Sileno vini.

ガラスドアが開いていたので中へ入ると、六十くらいの小柄、若干陰気な男がいた。店主らしい。彼に撮影の許可を求めると、英語は通じないものの —— どうぞ —— みたいなことになる。フラッシュを使って二枚撮り、そのまま立ち去るのも気が引けて店内を眺めていると、主は小さなワイングラスを取り出し、樽からこれに注いだ白ワインを勧めてくれた。アルコールが強化された、シェリーを思わせるような味わいだ。

グラスが空になったのを見届けると、彼は別の樽から新しいグラスに注いでくれた。笑みを浮かべることもなく、素っ気ない振る舞いに終始しているけれど、そこはかたなく暖かいものが感じられる。できればワインの一本くらい買いたいところであったが、旅の始めに重く嵩張るものを抱え込むことは避けたくて断念。心を込めて Grazie! を繰り返し、店を出た。

晩酌の準備に取りかかる。ワインショップからカテドラルの方へ僅かに戻ったところで、総菜屋を発見。覗いてみるとカウンター上の大皿に盛られた料理は、正体不明でありながらいずれも旨そうに見える。判りやすいところでシメジに似たキノコと野菜を和えたもの、イワシに魚卵をまぶしたように見えるもの(帰国後の調査でイワシのベッカフィーコと判明)とさらにもう一品を加える。合わせて 1.5€ (217円)。

次いで八百屋でミニトマト540g 0.8€ (116円)、肉屋で生ソーセージを一本90g 0.68€ (98円)でつまみはよしとする。さらに酒屋を探したが見付からず、バルで調達した。ウォッカ1本

12€ (1,736円)、ガス入りミネラルウォーター500cc 0.7€ (101円)。

宿へ戻ったのは5時半をちょっと廻っていた。呼び鈴に答えてドアを開けてくれた尼さんが笑顔で何事か尋ねる。カードに書いて貰い、電子辞書で単語を調べると、要は「問題なかったか」と云うことらしい。こちらも頬笑み返し無事を告げる。

日が暮れると辺りはしじまに包まれた。学校も運営しているこの修道院には、小学生くらいの寄宿生も十人ほどいるが、歓声を上げて騒ぐようなこともない。夜中に目を覚まし、バルコニーへ出てみた。風もなく、寒さを感じることはない。正面にライトアップされたカテドラルが浮かび上がり、頭上には群雲のあいだに星が瞬いていた。



総菜屋のカウンター。下左はイワシのベッカフィーコ。魚卵のように見えるのは玉葱、ニンニクをオリーブ油で炒めパン粉を加えたもの。



生ソーセージとミニトマト。



泊まった部屋のバルコニーから見るカテドラル。午前6時59分。

インターネット

10月20日も穏やかに明けた。シチリアに来てから雨天、曇天が続き、この日もまたどんよりとした雲に覆われている。8時に朝食堂へ行くと、まだ準備中のものであったけれど、席に着くことは出来た。炊事施設とは無縁であった部屋が、宿を開業すると共に急遽食堂として利用されるようになったためか、コーヒーはポットではなく、携帯用のステンレス

魔法瓶で供される。このようなところも一般の宿と異なり、初々しい感じが好ましい。
給仕の青年はアフリカ系で長身瘦躯で、僧職ではないらしい。昔ならば寺男とでも呼んだのだろうか。壁際のテーブルに布で覆われてクロワッサンやシリアルが置かれていることを教えてくれた。
通常のパンがないことを訝しく思ったけれど、ステンレス魔法瓶にしても通常でないことを考え、それにパンが食べたかった訳でもない。
テーブルはもう一つだけ用意され、二人分の食器などが整えられる。これが宿泊者の全てならば、辺りが静まりかえっているのもむべなるかなと納得。
9時近くなって外出しようと廊下を行くと、昨日チェックインを担当した「多少は英語を話す」修道尼と出会った。これ幸いに —— もう一泊したいので。 . . . —— と切り出して手続きを終え、さらに修道院の中を見せて貰えないか尋ねた。昨日貰ったチラシ(元々Web で宿泊施設を紹介するページがあり、それを印刷したもの)に載っている小さな写真が気になっていたのだ。
当面手持ちの仕事もなかったのか、彼女はにっこり頬笑んで快諾してくれた。これまで出入りする折りに数回通った廊下を出口付近まで行き、階段で地下へ降りる。しかし斜面に伏したように配置されているこの建物は、下から見れば二階部分へ降りたことだった。ともかく赤身を帯びた石積みみのホールは、13世紀に築造された原形を留めているようだ。
そこを抜けると質素な食堂で、尼僧達、その他修道院のスタッフ、そして寄宿している子供達が此処を利用しているらしい。食堂の隣はこれも質素な礼拝堂で、数人の尼僧がしじまの中で祈りを捧げていた。

電子辞書
2004年のスペイン旅行から電子辞書を携帯している。ポケット(紙)英和・和英辞書に較べ、文字が大きいだけでも老眼には有り難い。加えて目指す単語に辿り着くスピードも紙辞書のページを捲っているより格段に速い。
今回はオプションカード機能も利用することにした。イタリア語辞書カードを量販店から4千円弱で購入したのだ。内容は「日伊・伊日辞典」「イタリア語とっさの一言辞典」「旅行会話」。収録語数は一万程度。これをブレストポーチに入れて、必要に応じて直ちに出せるようにして行動した。



道路に面した出入口のある階からすると地下一階、食堂へ通じる。そして食堂の突き当たりにある窓から見れば地上二階。

いったん表へ出て、宿泊部の方へ戻り、小さな螺旋階段で元の階へ。何しろ古い僧院であることだし、隠し階段のような雰囲気
が楽しい。先程歩いた廊下を戻り、鍵の手のところでもう一階上へ
行く。下の階では宿泊用に供されているウイング部は、このフロア
もそのつもりらしいが未完成だった。出来上がれば三人部屋、四
人部屋になるらしいが、工事が行われていないのは、予算的な問
題などでそれほど先を急げないのかもしれない。最後に屋上へ出
てコンカ・ドーロからカテドラルまでのパノラマを楽しんで館内周遊
を終わった。彼女と共に長い廊下を玄関口へ向かう。

外出する前に、僅かにせよ英語を理解する人に訊いておきた
いことがあった。「この付近でインターネットにアクセスできる場所は
ありますか?」。彼女は玄関ホールの受付デスク(?)に坐る同僚
にも尋ねて、どちらも首をかしげている。ところがたまたま居合
わせた修道院長が、—— 私のコンピュータを使用すればよい
—— みたいなことを云った(らしい)。

ともかく彼女を先頭に一同院長室へ入った。中央にある大きな
執務デスクとは別に、片隅に事務機があり、そこにコンピュータがセットされている。やりかけであつた
らしい仕事を片付けるため、院長はパタパタとキーボードを叩いて手際よく処理を終わらせた。今の
世の中 —— 誰がコンピュータを操作しようが驚くには当たらない —— と頭で理解していても、
尼僧姿が眼前で鮮やかにキーボードを叩いているのは、やはり不思議な光景に思えるのだった。

「さあどうぞ」と云われ、メールチェックに取りかかる。収穫が一件だけあつた。出発前にインター
ネットに掲示しておいた、シチリアの郷土料理に関する問い合わせに、誰かが回答してくれたのだ。
早速そちらを閲覧し、お勧め料理十数種のイタリア語名と内容説明などを読む。

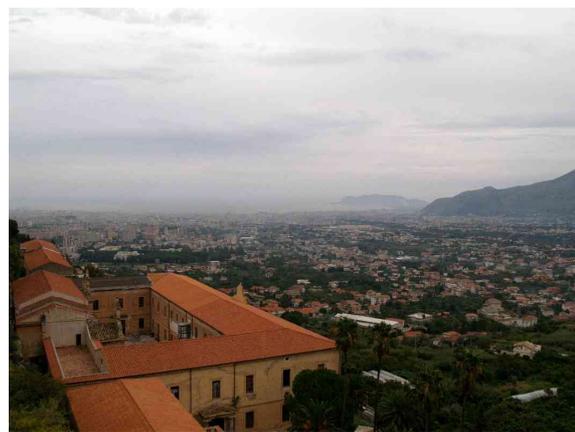
手書きでこれをメモするには無理があり、院長に乞うて印刷させて貰った。プリンターから漢字交
じりの文章がせせりだしてくることも、当たり前と判りながら、それでも一種の感動があつた。修道尼
達はイタリア語部分を拾い読みし —— おいしそうでよだれが垂れてきそう —— みたいなこ
とをささやきあっていた。

プリントアウトをブレストポーチにしまい、インターネットアクセスを終了する。世間相場の使用料と
して5€(723円)をお礼に出すと、院長はきっぱりいらぬという。これは予想していた反応なので、
急いで電子辞書を出し、寄付を引いて *donazione*(ドナツィオーネ)を得る。下手なカタカナ発音を
するより、これをそのまま見せると、彼女も破顔一笑、快く受け取ってくれた。皆に礼を云って退室
し、そのまま出掛ける。

この宿が気に入って、二泊に延長したものの、モンレアーレの見所といえばカテドラルくらいしか
ない。大幅に増えた自由時間をいかに使うかはかなり悩んだものの、まずはハイキングあるいはウ
ォーキングでここ数日の運動不足を解消することにした。日常生活では日課として6キロを速歩で
往復している。それが途切れていることに僅かながらも欲求不満があつた。



食堂のある階から表へ出たところ。正面一階上のフロアで、右端に見える小バルコニー付きの部屋に宿泊。



修道院の屋上からはパレルモまで遠望できる。



中央部後方にカテドラル。

修道院前の道をカテドラルとは反対方向へ行く。緩い上り坂が続き、5分ほどでホテルがあった。看板には Park Hotel とあり、パレルモのホテルリストによりモンレアーレの宿を確認したとき見た三軒の一つだ。バス停から此処まで荷物を引っ張りながら来るのは多少なりとも難儀だし、それほど魅力的ではない外観なのに、料金はシングル50€(7,234円)~60€(8,681円)とあつては、改めて床屋のオヤジに感謝する。



峠からパレルモを望む。中央部やや右に真っ直ぐ延びる道路を通過してやってきたのだ。

道は下りになりパレルモの方へ通じているらしいので引き返す。モンレアーレを見下ろしてみたい気持ちに変わりはない。新しいルートを探しながらも、結局昨日の最高到達地点を通過して、さらに坂道を登る。しばらくして準幹線道路へ出た。

路線バスも(たまに)通る道で、相互一車線は十分な道幅を確保しているが、通行する車両は疎らだ。右手にカテドラルを中心とした街を見下ろし、その向こうにコンカ・ドーロの果樹園や農地を眺めながら気持ち良く歩く。時々街並みを撮影するが、実のところ成果をほとんど期待していない。それでもシャッターを切るのは、ひょっとしたらの気持ちと、無いに等しいデジタル写真のコスト故だ。

何回か立ち止まり、単眼鏡で街を見下ろす。宿の修道院がどのように見えるか気になったためだ。しかしカテドラルはすぐに判り、広場を行き交う人々まではっきり観察できるのに、修道院が発見できない。登り始めて一時間ほどの10時40分、峠に達した。ぼやけてはいるもののパレルモ港も目視でき、

昨日バスで辿った道もはっきり判る。峠に達したことに満足し、ゆるゆる戻れば12時頃にカテドラル前広場へ着くであろう。

しかし修道院を未だ見付けることができずにいることが気分を落ち着かなくする。もう一度単眼鏡で、カテドラルから数回辿った道を丹念にトレースする。ようやく見付かったのは思いのほか地味な建物であった。



中央手前の屋上に青いタンクがある建物が修道院の宿泊ウイング。

修道院の内部を歩いて、その規模がかなり大きなこと、そして13世紀創建と云うことから、何となく豪壮なゴシック風外観を想像し

ていた。しかし考えてみれば何時の時代にも建立はあったし、それが多額の費用をつぎ込んだものとは限らない。地味だからといってこれにより落胆するようなことはなく、逆にこの修道院をよりのおいしい気持ちを入れて眺めなおした。

歩き足りた気分になり、高みまで登った目的も果たしたが、早く下っても昼飯時迄の暇つぶしに苦勞するだけだ。下り坂でも速歩にならないよう、意識してゆっくり歩む。シチリアに来てから、雨天、曇天が続いていたけれど、ようやく青空が広がって行き、これが気分を寛がせてくれる。

場末まで到達し、往路を外して適当に細い路地へ踏み込む。しかしこの街は単調な斜面に立地するためか、道路は碁盤の目に近く、迷路をさまようような楽しみは味わえない。下って水平に移動し、この後登る気にもなれないからまた下る。結局15分ほどで昨日の商店街にぶつかり、そこからは数分でカテドラルの前に出ていた。

ポートルート

昨日昼飯を食べた Piccolo Rifugio は既に開店していた。ちなみにモンレアーレにいた時は、店の名前など意識したこともなかった。この紀行を書きながら、ふと気になって調べてみれば「小さな隠れ家」との、洒落た名前であった。どこといって特徴のない店であったのに。

坐り心地が悪いことは経験済みなのに、懲りずに屋外席を利用した。メニューを落ち着いて眺められるのは二回目の余裕であろうか。アンティパストから一品。今までは量的に多そうだと判断して敬遠してきたが、この店は通常に加えて「半量」という選択ができる。しかしイタリアーノという名称から、どのようなものとも判らずに注文したものは、味にこそ不満はなかったけれどつまらないものであった。

スパゲティ・アツラ・トラパネーゼの方はメニューにそのように記載さ



観光バスはカテドラルより数十メートル下の駐車場までしか入れないらしい。しかしパレルモからの路線バスはカテドラル前まで来るし、さらに郊外路線バスは上の道を走っていた。



はじめは用途を理解できなかった。どうやら道路と、数メートル下がった宅地の昇降に利用するエレベーターらしい。



車の入れないような路地を拾って歩く。



アンティパスト・アツラ・イタリアーノ。



スパゲティ・アツラ・トラパネーゼ。

れていたの、スパゲティ・ポモドーロと云って構わなそう一皿であった。

グラスで頼んだワインを飲み、アンティパストをつまんでいるとき、視線が自ずと向かう方にいた女性が気になる。10メートルほど離れたブティックの店先に立ち、携帯電話で熱心に話している。声は聞こえず、聞こえても意味が判らないのに、なぜか彷彿されるは、辣腕の商売人がてきぱきとビジネスを進めてゆく有様だ。込み入った話なのか、かなりの長電話であったが、終えた後も立ち去らず、店の前のベンチに腰掛けていた。サングラスを外すと魅力的な容貌があらわれた。

アンティパストは半分ほどで止めにし、晩酌のつまみにするべく持ち帰りを要望した。スパゲティ・トラパネーゼは癖もなく美味。一時間弱で昼飯を終えた。アンティパスト3.5€(506円)、白ワイン二杯7€(1,013円)、スパゲティ6€(868円)、サービス料1€(145円)。勘定を払い終えて店を出ると、まだ先程の彼女がベンチに坐っている。

—— 紀行文の取材者としては写真を撮っておくべきであろう！ —— の意識が湧き上がった。ワインの酔いも背中を押したかもしれない。彼女の前に立ち、May I take your picture? と尋ねた。英語を全く話さないのか、背後の同僚(?)に通訳を頼み、意味が通じると頬が紅く染まってゆくのをはっきり判る。第一印象とは異なり、純情な人だ。しかしにっこり頬笑んでくれたから、怒ってはいないらしいことに一安心。三枚連射して礼を述べる。

帰国後ポートレートが出来栄えをコンピュータで確認すると、予想以上に良かった。彼女に直接送る手だてもないので、葉書に印刷したものを、床屋のサンチェス宛に送信した。運が良ければ届いているであろう。

いったん宿へ戻って午睡の後、4時になってカテドラルを再訪した。「芸術と歴史の島 シチリア」を読んで、回廊を見落としていることに気付いたためだ。入り口が判らずにしばらく迷走し、カテドラル身廊の端にテーブルが置かれ、その背後にひっそりとしたドアがあるのがそれと気付いた。テーブルのところで6€(868円)の入場料を払う。

一辺が40メートルほどの回廊は、ロマネスクのものとしては比較的規模が大きいように思われる。個人的好みとしては教会堂よりも回廊に惹かれるのは、前者が祈り中心の場であるのに対し、後者は巡回行進礼の通路として以外にも、瞑想や読書の場として発達してきたためであろうか。



カテドラルの回廊。

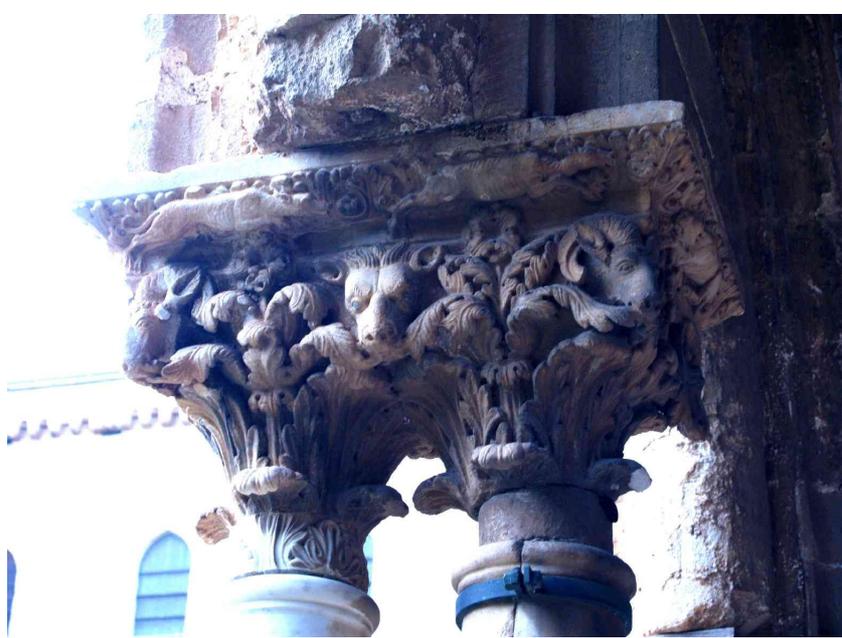
かつてどこの回廊を訪ねたときも、瞑想など縁遠かったとはいえ、その静謐な佇まいをいつも好ましく思うのだった。

回廊の雰囲気を楽しみ、柱頭や柱に施された彫刻やモザイクの意匠を鑑賞しながら行きつ戻りつ、およそ三周ほど廻ったであろうか。ちょうど回廊の対角線上に位置した入り口から、離れていてもはつきり日本人の団体と見て取れる人々が入ってきた。彼等と入れ替わるようにして退去する。

昨日も訪れた裏庭へ廻った。見物と云うよりは散歩の気分だ。午前中かいま見えた青空は、その後さっぱりだけれど、遠くパレルモの建物は陽光を受けて輝いている。天候が回復基調にあるならば有り難い。庭を一巡して出口の所に郵便局のCD機を見掛けてキャッシングを試みるが駄目だった。

宿の払いが現金だったため、手持ちの現金が20€(2,894円)程度までに減っている。これでは心許ないし、明日パレルモまでタクシー利用を考えていたので、もしそれを実行すれば、途中車を停めてキャッシングするような綱渡りを強いられかねない。——どこにでもCD機はあるはず——と高をくりすぎていたようだ。

まじめに探す気になり宿の方へと移動していき、カテドラル前広場を過ぎたところでようやくキャッシュディスペンサーを見つけた。しかしなぜか Citibank カードで引き出しができない。別の機械を探して街外れまで行ったが見付からず、数回辺りの人に尋ねてようやくメインストリートから少しばかり外れたところで400€(57,872円)を引き出した。このために一時間近く費やす。これに懲りて、それ以後は100€(14,468円)は予備費として通常の財布とは別管理にする。



柱頭への装飾は一本ごとに異なっている。



カテドラルの裏庭から遥パレルモを望む。曇天下だがあちらは陽光を浴びている。

モンレアーレにCD機が二台しかないというわけではない。いささかの不運と、逆上が災いした。引き出しできなかったことで周囲を落ち着いて見回すことができずに、カテドラル付近にもう一台あったのを見落とし、商店街の中心部では車道が工事中で歩道のみ通行できた50メートルばかりで、通ったのとは反対側に一台。気付いただけでもこのような具合だ。



街頭の焼き栗売り。スペイン、ポルトガルでもよく見掛けたけれど、イタリアの特徴は背の高い炉であろうか。

思わぬことで手間取り、通常の晩酌時間になっていた。帰り道の肉屋で美味そうなハムを見付けて購入。130gが1.82€(263円)だった。後はまっすぐ帰るつもりでいたが、宿のそばまで来て、傍らの教会から漏れ聞こえてくる歌声に寄り道をする。静かにドアを開けてみると、ミサの最中であつた。木曜日の6時15分、このような日時に執り行うのも珍しくないのだろうか。



ハム(Prosciutto cotto)。ちなみに日本ではプロシュートは、なにやら高級ハムとして喧伝されているようだが、イタリア語でハムは全て Prosciutto、加熱されたものが cotto で、生が crudo と云うことらしい。

この晩の泊まり客は他に誰もいなかったらしい。相変わらず静かに更けて行く。

イタリアのタクシー

10月21日の移動先はトラーパーニだ。選んだ理由は大したものではなく、何となく雰囲気が良さそうだし、シチリア島の最西端といえそうなところで、かつパレルモからそれほど遠くなかったから。モンレアーレから行くにはいったんパレルモまで引き返す必要がある。主として鉄道を利用するつもりだけれど、パレルモ中央駅まで直通のバスはなくタクシーの利用を考えていた。

トーマスクック時刻表によればトラーパーニ行きの列車は9時40分発だ。8時20分に尼僧達の笑顔に送られて修道院を出発する。キャリーを引っ張って歩いていると、向こうから来た緑のミニバンが短くクラクションを鳴らす。充分左側(日本とは反対)に寄って歩いていたのに、道幅が狭いせいかとさらに体を沿道の壁に寄せるようにすると、もう一度クラクションが鳴った。

改めてフロントガラスの向こうを窺うと、修道院長が頬笑みながら小さく手を挙げている。慌ててこちらも手を挙げると、ゆっくり通り過ぎていった。尼さんがコンピュータを使ったり、ミニバンを走らせるのも、現代社会で生活している以上、なんの不思議もない。しかし理屈はそうであっても刷り込まれた先入観が強いから、いざ現実に目撃すると、いつも強い印象が後に残る。

半ば呆然とミニバンを見送り、タクシー乗り場へ向かった。一台も待っている車がなく、すぐそばのバス停にはパレルモ行きが停車している。今ならば確実に坐れるし、市内でタクシーを拾った方が良さそうだ。一昨日購入したバスチケットは、本来払うべき乗車料金の対価として、使わず日本へ持ち帰るつもりでいたが、図らずも成り行きから此处で利用することになった。

10分ほど待たされて、ほぼ空席がなくなった頃、バスは発車した。来たときのコースをそのまま逆に辿り、Indipendenza 広場に着く。通行している車両が多い割に、タクシーは中々現れなかった。ようやく流れてきたタクシーに手を挙げると、停車して対応はしてくれるものの、なぜか乗車できない。運転手の身振りによる示唆に従い、広場を周回して行くとシチリア行政区庁舎があり、警備の警官が立っていた。

彼にタクシー乗り場を尋ねると、英語は通じないけれど、電話で呼んで貰えることになった。数分後にそのタクシーが到着し、改めて警官に礼を述べつつ乗車する。

10分ほどの乗車時間であったか。距離的には(帰国してから)地図上で計ったところ1,600メートルほどであった。タクシーメータは12を表示している。ともかく(必要か不明な)トランク使用料とチップを含め14€(2,026円)支払った。随分割高な印象が残る。ボラれたならば、警官に呼んで貰った結果としてその事態は半ば滑稽でさえある。あるいは迎車料金が高いのか、はたまた正規利用金がそもそも高いのか。モンレアールからタクシーで来なくて良かったと思うし、今後の利用も慎重にすべきと肝に銘ず。

トラーパーニまで126kmの切符6.45€(933円)を買い、電光掲示板を見上げると TRAPANI 9:55 No9 と表示されている。手持ちの時刻表は古いものだし、それでなくても食い違いは良くあることだ。半時間ほどあるので、まずトイレへ行った。

中央駅のトイレはコイン投入方式の有料で、料金は1€(145円)と見定めた。しかし地元の人に倣おうと辺りを見回していると、清掃兼管理のオヤジがやってきてコインを取り上げ、管理用カードを使いゲートを開けた。定かではないが、女性用トイレへ入っていったバアサンはコインを投入していたし、どうやらオヤジの個人的収入になってしまったようだ。

個室に入って便器に腰掛け、しばらく経つと明かりが消え真っ暗になる。以前スペインで同様の経験があり —— タイマーで消灯されたか —— と、パニックに陥ることなく済んだ。さらにもう少し勘が働き、頭上辺りで手を振ってみると、照明が再点灯された。しかし消灯タイマーのセットをもう少し長めにしても良さそうに思う。

発車までしばらくあるので、駅の様子を観察しながら9番線へ行く。トラーパーニ行きはまだ入線していない。警官がいたので訊いてからホームの様子を撮影。スペインでは撮影禁止であったことを思い出したからだ。のんびり観察しているうちに8番線は TRAPANI 9:40 と表示をされているのが目に入った。腕時計を見ると既に39分だ。

慌てて小走りに乗車口へ行き、それでも付近の乗客に切符を見せてトラーパーニ行きであることを確認した。トーマスクック時刻表は正しく、先程見上げたのはどうやら到着列車に関する表示であった。車内はかなり混んでいて、空席がないのは勿論、移動するにも通路に立つ人にスペースを譲って貰わなければならない。ともかく我が身と荷物の落ち着き場所を確保したとき、列車は走り出した。

数分後に一駅目に停車した後、すぐ地下に潜りまた数分後にオルレアンス駅に停車した。階段付近の行き先表示に INDIPENDEZA の文字が見える。この時はもしやと思っただけで行き過ぎるしかなかったけれど、四週間後にパレルモを再訪し、地上を歩いて確認できたことは、モンレアール

レからのバスを降りた後、徒歩でこの駅まで来るのが最も効率の良く費用もかからない乗り換えと云うことだ。しかし言葉の判らない異国からの旅行者が、事前情報もなしにそこま出来ようはずもない。

オルレアンス駅でかなりの人数が降り、すぐそばの座席に座ることが出来た。パレルモ近郊で降りる人が多く、郊外に出たとき既に車内は数人の乗客がいるだけだった。



9時40分発のトラーパーニ行き列車。11月14日にチェファルーからセジェスタへ移動するときに撮影。10月21日にはそのような余裕はなかった。



アルカモ・マリーナ付近



快適な車内に乗客はほとんどいない。

トラーパーニ

海岸線に沿って西へ進む。列車の旅で、海が近いのにさっぱり見えず、欲求不満になることも多いけれど、この路線は明媚な海浜風景を堪能できた。1時間ちょっとでアクカモ・マリーナ駅付近を通過する。美しい砂浜が続き、リゾート地らしい雰囲気が漂う。さすがにこの時期、渚で遊ぶ人影もないが、締め切られた別荘風の庭に、秋を感じさせない赤紫の花が、妍を競うかのように咲き乱れている様は、かえって風情がある。

次のアルカモ・デラマジオーネ駅でしばらく停車した。トラーパーニへ直行する線と、迂回して南にあるマルサーラを経由のトラーパーニ行きが分岐する駅だ。しかし乗降する人はほとんどなく、ひたすら長閑な停車だった。

この駅を発車するとまもなく、右手に港町カスレラマーレを見ながら、線路は大きな弧を描いて左へ曲がって行く。緩い昇りが続きなだらかな丘陵地帯へ分け入る。手入れの良い耕地が連なり、そのほとんどは葡萄畑だ。長短二つのトンネルを抜けたところでセジェ

スタ駅。この時はこの付近に遺跡があることも知らず、ましてや後に此处で下車することになるなど露知らずで、もし判っていれば、もう少し事前調査的な目で辺りを観察していたであろうに。

セジェスタからは半時間ほどで11時50分の定刻、トラーパーニ駅に到着した。車両から吐き出された十数名は、それぞれ行き先がはっきりしているらしく、数分のうちに辺りに旅行者はいなくなる。しかし駅周辺を一回りしてもホテルらしいものは見当たらなかった。

仕方なく駅舎へ戻り、電子辞書から *informazioni turistiche* (観光案内所) をメモホルダーに書き写したのを、出札係の女性に示した。不機嫌そうな彼女は、こちらの知りたいことが判ってか否か、ともかく北の方にある出口を指すのだった。こうなってしまうと、そちらから探索するしかない。



セジェスタ駅付近。

駅前で恰幅の良い老紳士に —— 多少は英語が通じるか？ —— の期待も交えて尋ねつつ、*informazioni turistiche* を見せる。しかし英語が通じないだけでなく、観光案内所の存在も知らないらしい。 —— 何となくこちらの方では —— と心許ない勘を頼りに行くが、方向音痴であることは自覚しているだけに気分的に落ち込む。

列車到着時に、大きめの荷物をキャリーに付けた、六十くらいの男性二人連れがいた。彼等も探しつつ同方向へ行くのに気付いたときは幾分励まされるが、しばらくするとその姿も見失った。ガソリンスタンドのオヤジに訊くが反応は芳しくない。パトロール中の警官にメモを見せると、教えてくれたのは旅行代理店だった。

しかしこの代理店で英語が通じ、初めて進む方角に自信を持って行くことが出来る。この後カフェ、ブティックの前にいた店員と常連客、ブックショップ、通行人と質問を繰り返し、少しずつ目標に接近して行く感触を持ちながらの前進であった。

ようやく観光案内所にたどり着いた。駅からは多少遠回りをしたこともあり、2キロほど歩いたであろうか。勝手の判った道筋ならば、長いとは思わないが、不安を抱いて瀬踏みしながら歩いていけば、「ようやく」の気持ちは強い。

中年の男女二人がカウンターの向こうに坐っていた。女性の方にだけ相談者がいたのに、男性は英語を話さないらしく待たされる。しかし案内所が無事見付かり、余裕を取り戻していたから、のんびり構えていられたし、そして実際には大して待たされることもなかった。

いつも通り、市街平面図とホテルリストの入手、インターネット・アクセスポイント、スーパーマーケット、お勧めレストランの所在確認と進める。彼女は淡々と、しかし手際よく対応してくれた。一通り終わり礼を述べ、部屋の片隅に空いていた椅子に場所を移す。老眼鏡を出してホテルリストを検討した。

パレルモで貰ったのと同じ記載形式なので、とまどうことなく読めたものの、ホテルの所在地を示す平面図がない。リストの住所から、市街平面図の小さな文字で記載された街路名を対照して行く作業は、他の方法が可能な限りはやりたくない。幸い此処を訪れる利用者はその後なく、彼女は暇そうに新聞を読んでいる。

リストと平面図を持ちカウンターへ戻る。三つ星程度で最寄りのホテルを希望すると、彼女は即座に —— *ヌオーヴォ・アルベルゴ・ルツ* (*Nuovo Albergo Russo*) ならば... —— 案内所から

二、三百メートルにある宿を平面図上にマークしてくれた。値段も手頃のようだ。

再び礼を述べ、今度は荷物をまとめて宿へ向かった。確かに二、三分で行き着いたそこは、旧市街のメインストリートに面し、予想以上の好立地であり、建物の雰囲気も落ち着いたものであった。ホテルリストの記載によれば1955年築造、01年の改修らしい。



宿の前。宿への玄関は右に曲がる路地を10メートルほど行ったところにある。

フロントにいたのは痩せぎすで三十前後の女性だった。どこか寂しげな風情だが、対応は暖かい。下見させて貰った部屋は、玄関のほぼ真上で、表通りが垣間見える雰囲気も悪くない。一泊朝食なしで40€(5,787円)。

部屋に荷物を納めて、昼食へ出掛けようとロビーへ降りると、駅やその近辺で見掛けたあの男性二人連れがいる。—— 行き着く先は同じであったか —— の想いで視線を合わすと、彼等もこちらの存在は意識していたらしく、「ヤアヤア」と云った感じで挨拶を交わした。

宿を出て港へ向かう。案内所推奨のレストランへ行くつもりであった。しかし徒歩2分で辿り着いた港にレストランらしいものは見付からない。改めて市街平面図に彼女が記したマークを見ると、船のイラスト上だ。確かにその辺りには五百トンくらいのクルーズ船が停泊し、船上レストランの可能性はある。しかし看板も出ていなばかりか、タラップも閉ざされ、よそよそしいことこの上ない。案内所までは1分で行けるが、再確認するには昼休み時間になっている。

未練がましく界限を半時間ほど歩いた末、意気消沈して大衆食堂へ入る。テーブル席に若い男が二人談笑していたので、食事が出来るか尋ねると、奥の方へ声を掛けて店のオヤジを呼び出してくれた。

しばらく電子辞書を頼りにイタリア語メニューと格闘し、Spaghettini al ricci di mareにした。ricci(riccio)がウニであると辞書に出ていたからで、それ以上どのように料理されているか知る由もなかった。デカンタで注文した白ワイン(メゾと頼むと0.5ℓ)

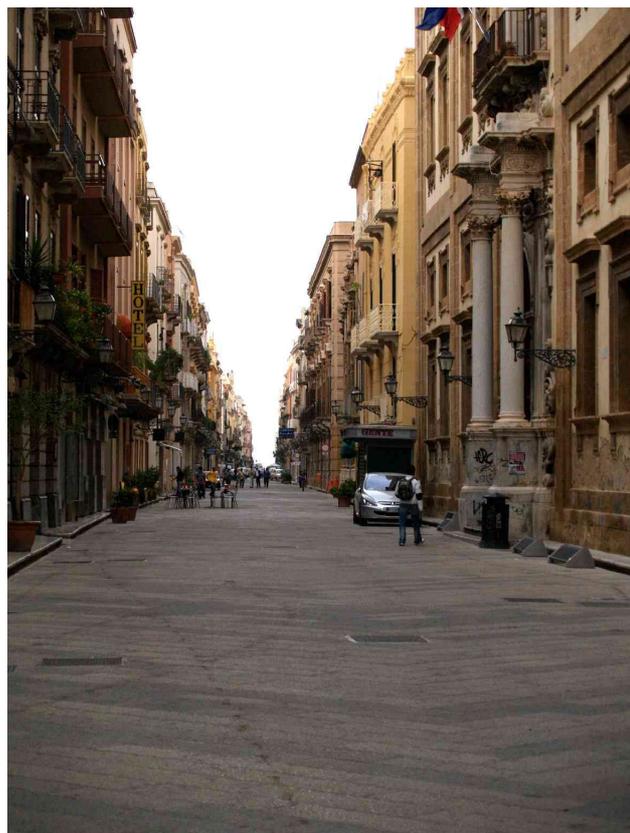


ウニスパゲッティ。

来る。ちなみにグランデで1ℓを飲みながら待つと、5分ほどでウニスパゲッティが到着した。

スパゲッティの茹で具合は、さすが本場と云うべきか、大衆食堂といえどもしっかりしたものだ。ウニの調理法は判らないものの材料の鮮度は良く、量に不足もなく、そして肝心の味わいも満足するべきものであった。先客二人以外、新たな来店者もなく、静かな食堂でゆったり昼食を楽しむ。ウニスパゲッティ9€(1,302円)、白ワイン500cc2.5€(362円)、席料1€(145円)であった。

ほろ酔い機嫌より少し手前、それでも十分に寛いだ気分で、昼休みのためか人通りも疎らな街を散歩した。



昼休みの閑散とした街路。



見事なノッカー。市販されているのか？ 薪屋で会った少年。

半時間ほどさまよってから宿へ戻り、1時間ほどの午睡ののち、再び街へ出た。メインストリートのエマニュエル通りを行くと、一軒の町屋に小型三輪トラックから薪を搬入していた。山間部ならばともかく、都市部で薪利用のシステムが確立していることに感銘を受け、資料として二枚撮影した。傍らで見ていた薪屋(?)の少年が、撮影を要求するのでもう一枚。

モニターでその画像を見ただけでは芸がないのでメモホルダーに住所を書いて貰った。帰国後しばらくは「どうせヶ月も経過しているのだから」と放置し、年末近くになってから、クリスマスカードとして郵送した。

閑話休題。エマニュエル通りを西へ歩くと、同じ街路がクロソからカロリーナとそその名を代える。のんびり歩いて10分ほどで街外れを感じさせる小さな広場に出た。斜めに延びた通りの行き止まりに石造りの建物があり、鶴の嘴のように延びた半島の最先端になっている。さほど大きくない建物を一周し、戻りは南の海岸沿いにコースを選んだ。



薪を運ぶ小型三輪トラック。薪が現役燃料であるのは、経済性や後進性によるものではなく、文化的なものと推察する。



トラパーニ港は工業的部分、旅客搬送部分、漁港と隣接しており、半島の先端に近い部分が漁港になっている。

港はこの辺りで漁船の集積地になっている。日本ならば、これだけ水揚げがありそうな場所は近接してセリ市場があるものだが、それらしいものは見当たらない。流通形態が異なるのであろうか。

爽やかな海岸通りを東へ向かい昼飯を食べた食堂のすぐ先でインターネットカフェを利用する。ちなみに先程は昼休み中だったのだ。



一定方向の風が吹くのか、海岸通りの並木は同じように傾いていた。

ドアを開けると正面にカウンター替わりのテーブルがあり、此処で受け付け。やはりパスポートを要求された。ちなみに少し経ってから制服警官が(多分私用で)利用しに来て、同様に身分証明書を出していた。法で定められているならば当然なのであろうが、何となく滑稽な感じを受ける。

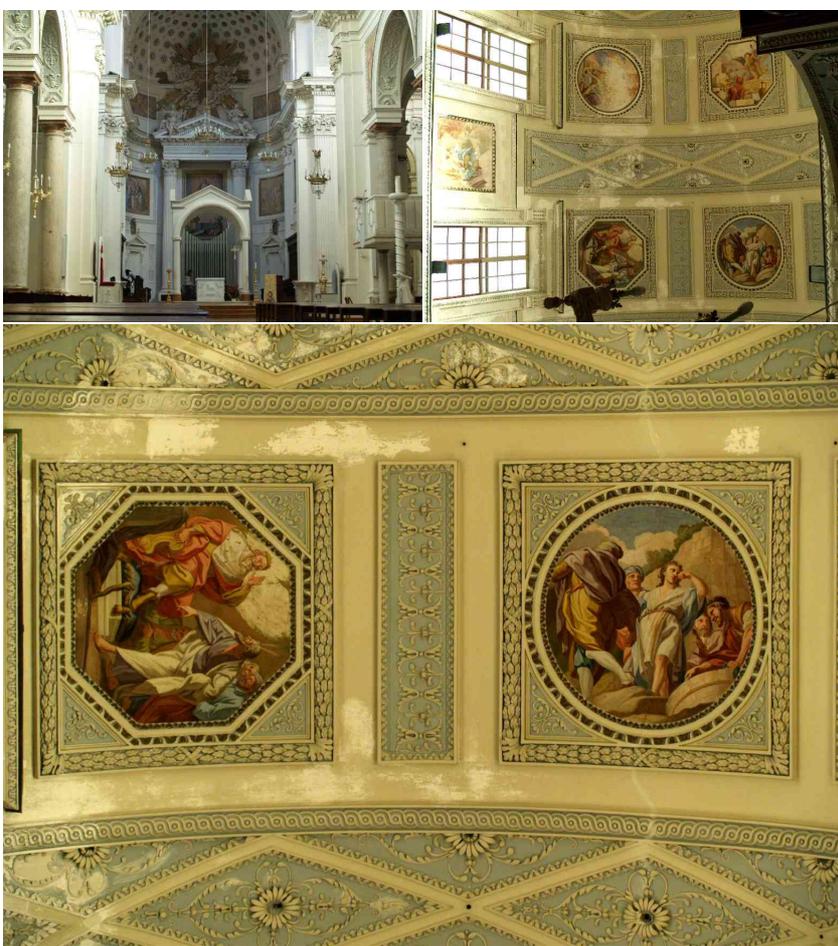
コンピュータは隣室に五、六台あり、一人だけ先客がいた。パレルモでアクセスした時とは異なり、十分な通信スピードで、いろいろさせられることはなかったものの、いつも通りろくなメールはなかった。1時間ほど、その他ネットサーフィンなどで時を過ごす。料金は4€(579円)。

宿への帰途、寄り道をして晩酌関係の調達をする。一軒目でガス入りミネラルウォーター500cc 0.5€(72円)、ミネラルウォーター2リットル0.6€(87円)、ヨーグルト500cc 1.16€(168円)、もう一軒酒屋によりジン1壇6.79€(982円)、チーズ1.6€(231円)、瓶詰めオリーブ1.34€(194円)など。トラパーニはモンレアレに較べれば大きな街だけれど、この宵も静かに更けた。

朝市

深夜から早朝に掛けてかなりの降雨があったようだ。雨音から察するばかりだけれど、明けてみると久々の青空が広がっていた。朝一番に下着の洗濯をする。明日の出発までに乾いていることを期待して。

9時を少し廻ってから街へ出た。手始めは宿のほぼ向かいにある、14世紀創建の聖ロレンゾ・カテドラル。時期的に初期のルネッサンスと云うことだろうか。明るい内部は軽快なすがすがしさに溢れている。



聖ロレンゾ・カテドラル(14世紀)の内部と天井フレスコ画(下は部分拡大)。

時刻が早いせいか、訪れる人もほとんどなく静かなひと時を堪能した。

表へ出てエマニュエル通りを西へ行く。既に一度歩いたところだけれど、時刻と光線の加減、さらには行き交う人々の雰囲気も違い、新鮮な気分で見事に目を配る。



エマニュエル通りで見掛けた B&B の入り口。宿泊部分かどのようなものであるかは判らないが、想像する限りは魅力的だ。



西の突端まで行き、昨日とは反対の北側海沿いを戻る。突端付近に聖リベラーレ教会が慎ましい佇まいを見せていたけれど、ドアは閉ざされ、内部を見ることは出来なかった。遊歩道を辿って行くと、インペリアル要塞が無骨な姿で聳えている。16～17世紀にトルコの海賊に備えて築かれたものらしいが、これも閉鎖中。10時前は早過ぎると云うことなのかもしれないが、面白そうな様子もなかったので未練もない。

要塞のところで遊歩道は途切れるので、



エマニュエル通りのカフェ。

いったんエマニュエル通りへ戻り、行きがけに見掛けて好ましく思っていたカフェに寄る。朝10時の日陰でも、シャツ一枚で屋外席に坐り寒くない。カプチーノ一杯1€(145円)、を飲み、ついでにトイレも済ませて再び歩き出した。

適当に北へ針路を取ると、路地を幾つか曲がった末、海岸沿い遊歩道へ出た。15分ほどのんびり行き、旧市街的な部分が終わりになる。右へ曲がると Piazza Mercato del Pesce(魚市場広場)だった。既に10時半になっていたから、一番活気がある時刻は疾うに過ぎていたのかもしれない。

しかし異邦からの訪問者としては、激しい売り買いに殺気だった場所などへ割り込むことなど到底出来ないから、ちょうど良い頃合いに訪れたようだ。売り手達のあいだには一日の仕事を終え、余韻を楽しんでいるような寛いだ雰囲気漂う。スタンドよりさらに小規模な、テーブル店でスナッ



Piazza Mercato del Pesce(魚市場広場)。



魚卵などの加工品をパンに挟んで食べさせる。



クを販売していたアンチャンが、パンに挟んだ魚卵加工品を奢ってくれた。半ばむりやり食べさせて金を受け取らないのだ。

このような市場を見物するのは好みだから、それほど広い場内を覗いて廻り、ついつい買いたくなるのを抑える。店の数は限られているし、買わずにじろじろ見てばかりいるのも気が引け、三枚ほど撮影したのち魚市場広場を出た。

時刻はまだ10時半を廻ったばかりだ。海沿いをもうしばらく歩いてみたものの、景観に面白さが足りず内陸部へと方向を転換した。昨日観光案内所を尋ねながら歩いた通りと交差し、(迷っていたから長く感じたので)実際の距離にしてみればいかばかりでもなかったことを再認識する。

市街平面図の記載から聖ペテロ教会を見ることにした。11世紀の創建で18世紀に改修されたという由緒に惹かれたためだ。道筋を平面図で確かめながら行くうちに、観光



魚介類以外にも野菜、乾物や漬け物なども扱っている。

案内所お勧めだったもう一軒のレストランが順路にあることに気づき、一応店構えを観察する。店の規模も手頃で、奇抜なところもない、感じの良さそうな店だった。しかし照明は点いていないから、ひょっとすると休みかもしれない。

聖ペテロ教会はレストランから直線距離にすれば100メートルもないところにあった。外観は地味なもの、内部は絢爛たるバロック様式だ。しかし未だに現役の教会として使用されているはずなのに、何か殺風景な、祈りの場とはそぐわない雰囲気漂う。その原因が何か判ら



聖ペテロ教会(11/18世紀)内部。

ぬまま、5分ほどのあいだに四枚の写真を撮ったのみで退去した。

昨日トラーパニ駅から旧市街へは迷いながら遠回りをして行った。時間も余っていることだし、翌朝の旅立ちに備えて、最短ルートを確認する。宿から駅までは15分を見込んでおけば良さそうだ。駅まで行ったついでに周辺を一回りし、駅の隣がバスターミナルであることを発見。

ターミナルの待合室で、次の目的地アグリジェント行きの時刻表を手に入れた。しかし平日ならば三便あるのに、明日の日曜日は午後7時45分だけで、着くのが10時45分では論外と諦めた。

バスターミナルを出て、駅舎の時刻表で明日の列車を再確認。7時半で間違いない。入ったのは反対側にある出入り口から表へ。トラパーニの第一歩を踏み出したところだ。半ば時間を持て余しつつ辺りを見回すと、ほぼ真正面にホテルがある。昨日は落ち着いていたつもりであったが、このような見落としをしていたとは！しかしこのクリスタルは四つ星ホテルで、一泊102€(14,757円)～251€(36,315円)と高い。さらに立地を比較すれば、旧市街のど真ん中にあるルッソの方が好みだ。怪我の功名とでも云うべきか。

駅周辺で時間を潰したものの、まだレストランの开店時刻には早過ぎるので、順路にある聖ペテロ教会を再訪した。目当てのものなどないから、漠然と中へ入って行くと、足早にすれ違おうとした若い女性が —— Do you speak English? —— と尋ねる。応ずるとこの教会に関するあれこれを簡単に説明してくれた。明らかに僧職ではないが、教会関係のボランティアだろうか。説明された内容は、こちらの英語力不足で理解できない部分もあり、そして判ったこともほとんど忘れてしまったけれど、強く印象に残ったのは —— 此処のパイプオルガンは世界に一つしかない珍しいもので、キーボードが七つある。... —— だった。

彼女が立ち去った後 —— それほど珍しいものならば —— と、慌ててその形を撮影するが、浅はかなことであった。パイプ部分を見たところでなんの変哲もないのだから。

件のレストラン、カンティーナ・シチリア(シチリアの酒蔵:良い名前だ)を再訪する。表のドアは開け放しになっていたが、照明は消えており、ドア口から声を掛けると、若い男が出てきたものの、話がさっぱり通じない。彼の方ももどかしげに同じことを繰り返しているうちに、右手の路地から二十歳くらいの女性が現れた。彼の表情にホッとしたようなものが浮かぶ。

彼女はこの店のウェイトレスであり、そして唯一英語を話すスタッフだった。告げられた内容は「开店時刻は12時45分」と唯それだけのことだ。ともかくそれまでの半時間を潰すため、界限をもう一回りする。

色々収穫があった。まず八百屋の店頭で赤蕪を発見。直径4センチほどの蕪は、生のままちよつと塩を振れば酒のツマミになるので、一束を0.8€(116円)で購入。家にいれば決して捨てない葉の部分だけけれど、旅先では調理も出来ず、かといって宿の屑籠に放り込むのも気が引ける。八百屋に頼むと言葉は通じなくても快く処分してくれた。

そして次はチーズ下ろし機だ。ふと覗いた金物屋のショーウィンドーにあった。フランス Mouli 社の製品で、久しい以前(多分ポルトガルで)一度入手したが、あまり使用することもなく、そのうち所在不明になってしまった。ところが

最近パルミジャーノチーズを好むようになり、粉チーズにする道具としてこれを是非手に入れたいと思っていた。



聖ペテロ教会のパイプオルガン。



スパゲティンクとグレーター。右はグレーターを分解した状態。簡単に分解できるので洗うのが楽。

早速店に入り、オヤジをその棚まで引っ張って行き「コレ！」と指す。欲しかったのはこれだけであつたが、せっかくイタリアの金物屋に足を踏み込んだのだからと、スパゲティンクも併せて購入。グレーター5€(723円)、トンク5.5€(796円)だった。

話が先走るが、グレーターはこのままカバンの中に納めにくく、スキー用防寒下着シャツにくるんで旅を続けた。本来は防寒のために用意したものなのに、シチリアは暖かく、着用の機会は全くなしであったから、このような形で役立ってくれたのは幸運。

閑話休題。時刻も丁度になり、徒歩2分のカンティーナ・シチリアへ向かう。店内に客は居らず、照明も暗くなったままであつたけれど、奥から出てきた最前の彼女はすぐスイッチを押し、笑顔で迎えてくれた。

イタリア語メニューしかなく、インターネットで入手したアンチョコや、電子辞書などを利用してもさっぱり判らない。彼女にパスタ系でシチリアらしいもののお勧めを訊くと、二つばかり挙げてくれた。どちらも想像さえ付かない料理なので、どうせならば此処の地名が入っている **Busuate alla Trapanese e melanzane** にする。ワインもついでにお勧めの赤を一本。

帰国後調べてみると **Busuate**(ブツチャータ)は、トラパーニ特産のパスタで、螺旋状に捻れているのが特徴らしい。**melanzane**は茄子。

パスタに乗っているソースはメモその他がないので、今となってはこの料理に関し、写真から読み取れる情報しかない。とにかく美味であつたことと、**Primo Piatto**(一番目の料理)で、一般的にはコースの一部なのに、これだけで腹が一杯になつたことしか記憶にない。

1時間ほど掛けてカンティーナ・シチリアの昼食を堪能した。この間に二組ほど入ってきたのは、雰囲気からすると常連客らしい。気取らずに食事を楽しめる店なのだろう。勘定も安く、席料1.5€(217円)、パスタ7.5€(1,085円)、ワイン一壇6€(868円)、カプチーノ2€(289円)だった。

微醺を帯びて宿へ向いそぞろ歩き、宿が経営しているカフェ(P.29 写真参照)で、もう一杯カプチーノ1.5€(217円)を飲んでから昼寝をする。



カンティーナ・シチリアの店内



Busuate alla Trapanese e melanzane。

チュールレース

4時になって再度外出する。港を散歩しインターネットカフェでメールをチェックしたけれど、目的は他にあった。昼飯の帰りに見掛けたレースの専門店がそれで、昼休みが終わるのを待っていたのだ。ネットカフェで多少引っかけたため、予定よりは遅れたものの5時10分には、チュールレースの品定めをしていた。

店内にいたのは六十くらいの婦人で、オーナーらしい。ボビンレースの作業に没頭していた。放っておかれる方が気楽なので、これ幸いと展示されているレースをゆっくり見分する。正確に云うならばレースに関する知識もないし、審美眼の方もさっぱりだから、実のところは眺めていただけだ。

それでも好き嫌いはある。ショーケースの中に置かれた、テーブルセンターが気に入り、彼女に頼んで取り出して貰った。テーブルセンターだけでなく、ピースマット三枚が付加されたセットであった。値札を見ると120€(17,362円)。見た目の美しさ、細密な仕事、四枚合わせた総面積を総合的に考えると安価だと思う。

それならば —— 似たようなセットはないだろうか？ —— と彼女に尋ねた。どうせならば一番のもの入手したいし、わざわざシチリアから土産にするならば、一セットに限定することもない。通じるとは思わなかったけれど、リズムを取るような意味合いで発した英語の問いを、彼女はなぜか値下げの要求と理解し、100€(14,468円)に負けてくれた。

安くなったことに不満はないが、値切ことは好きではない上に、まず同種の幾つかと比較をしたい。電子辞書の助けを借りたりして、しばらくの噛み合わないコミュニケーションの末、

ようやく彼女は引き出しから数セットを取り出した。

せつかく苦勞して出して貰った品々だけれど、どれも好みに合わず、結局最初のセットを買うことにした。クレジットカードを示すと頭を振って何事か云った。多分「現金以外はパーソナルチェック」みたいなことらしい。取り敢えず現金で支払っても財布が空になるようなこともなかったのだから、50€札二枚と20€札を引っ張り出す。伝票の作成、品物の包装など、全てを終えて店を出たとき値下げのことを思い出した。20€(2,894円)損したわけだが、まあ良いだろう、値切ことは嫌いなのだから。



港のヨット用棧橋と、そこに設けられている給水、給油装置。



チュールレースのピースマット。下は部分拡大。



作業中だったボビンレース。



トラーパーニ港の夕焼け。

宿へ引き返し、改めてチュールレースを眺め、—— 悪くない買い物であった —— と、独りごちる。6時10分を廻って、港の日没が気になり、再度出掛けた。横断歩道橋の上から西を眺めると、まさにあと数分で沈んでしまう。出遅れたと云うべきか、美しい夕焼けなのに、前景がこの限界でいたって殺風景だ。

良位置を求めて西へ急ぎ足で行くが、見るみる日は落ちて行き、求める場所へ行き着いたときは既に残照しかなかった。しかし撮影結果を見れば、満更でもない。まぐれ当たりに間違いはないけれど、ともかく —— 終わりよければすべてよし —— だ。

アグリジェントへ

10月23日の日曜日、6時50分にチェックアウトする。表はまだ薄暗く、街路に人通りはない。薄暗くても、既に数回往復し、通い慣れた感じさえする駅への道筋は、迷うことなどないばかりか、むしろ車両や通行人がいないだけ歩きやすい。

駅に到着してまず切符を買う。パレルモ経由アグリジェント264キロが6€(868円)であった。パレルモから来るときの料金が6.45€(933円)かかったことを思い出すと、距離が倍近いのに計算が合わない。券面に **WEEK END 50%**の文字を発見したのは随分後のことになる。

切符に刻印も済ませてまもなく、パレルモ行き列車が入線する。6時53分、宿を出た直後。

こちらへ来るときの車両に較べるとだいぶ老朽型で、それは構わないけれど窓ガラスがひどく汚れている。その結果、トラーパーニ、パレルモ間の写真画像はない。



レース店からの帰途に見掛けた結婚式。頭上に手を挙げ、ファインダを見ずに撮影したところ、右の方へ振られてしまった。



晩酌のつまみになった赤蕪。



トラーパーニ→アグリジェントの切符(縮尺二分の一)。